平成 30 年　科学研究費基盤研究 B　研究課題番号 17H02025

好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究　Ⅱ

2019

近代博物館形成史研究会

例　言

1　本報告は平成29年度科学研究費基盤研究（B）「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」（代表　内川隆志）の平成29年度研究成果報告である。

2　平成30（2018）年は松浦武四郎生誕200年にあたり、それを記念して北海道博物館・三重県総合博物館・北海道立帯広美術館で実施した特別展「幕末維新を生きた旅の巨人松浦武四郎」の内、平成30年9月29日に実施した、三重県総合博物館との連携企画　近代博物館形成史研究会研究成果報告会「武四郎研究の最前線2018」の研究報告書である。（当日の司会進行は三重県総合博物館の太田光俊氏にお願いした。）

3　研究組織（近代博物館形成史研究会）は以下のとおりである。

研究代表者　内川隆志（國學院大學研究開発推進機構教授）
分担研究者　長谷洋一（関西大学文学部教授）
　　三浦泰之（北海道博物館学芸主査）
連携研究者　Ilona Bausch（國學院大學博物館客員教授）
　　川村佳男（九州国立博物館主任研究員）
　　Daan Kok（ライデン民族博物館主任研究員）
　　Matthi Forrer（元民族博物館主任研究員）
　　宮崎克則（西南学院大学国際文化学部教授）
研究協力者　伊藤大祐（國學院大學学術資料センターPD研究員）
　　堅田智子（上智大学文学部特別研究員）
　　鎌形慎太郎（國學院大學大学院文学研究科史学専攻博士課程前期終了）
　　サイモン・ケーナー（セインズベリー日本藝術研究所総括役所長）
　　阪本是丸（國學院大學神道文化学部特任教授）
　　徳田誠志（内庁書陵部首席研究官）
　　成澤麻子（公益財団法人静嘉堂文庫司書）
　　山本命（松浦武四郎記念館学芸員）
　　山本哲也（新潟県立歴史博物館専門研究員）
　　米崎清実（武蔵野ふるさと歴史館学芸員）

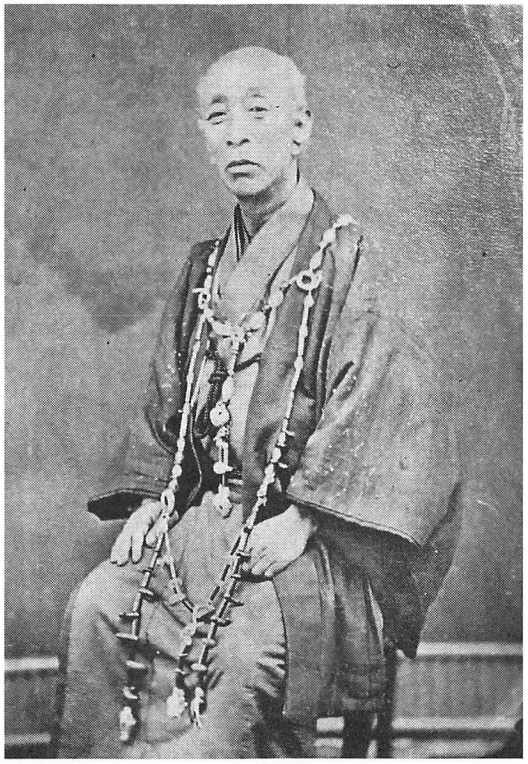
4　本書の編集は内川隆志が実施し、伊藤大祐が補佐した。

5　本書の執筆は各論文に明記したとおりである。

6　本書を編集するにあたり下記の諸氏、機関よりご協力を賜った。記して謝する次第である。
五十音順（敬称略）
生田隆明（三重県生涯学習センター）・大野照文（三重県総合博物館館長）・太田光俊（三重県総合博物館学芸員）・富山悠香（國學院大學大学考古学研究室）・澤田忍（三重県生涯学習センター）・高橋桃子（國學院大學卒業生）・瀧川和也（三重県総合博物館学芸員）・寺本久彦（三重県総合博物館副館長）・星野利幸（三重県総合博物館学芸員）・静嘉堂・北海道博物館・松浦武四郎記念館・三重県総合博物館・三重県生涯学習センター

好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究　Ⅱ

研究成果報告会　武四郎研究の最前線 2018



2019

近代博物館形成史研究会

目　次

はじめに…… 1

玩物喪志にあらず－好古家松浦武四郎の古物蒐集　内川隆志…… 3

好古家松浦武四郎のネットワークと人物像　三浦泰之…… 12

古銭蒐集家としての松浦武四郎　山本　命…… 20

静嘉堂文庫所蔵　松浦武四郎旧蔵の鍬形石について　徳田誠志…… 25

松浦武四郎コレクションからみた「武四郎涅槃図」　長谷洋一 …… 36

シーボルト兄弟の明治蝦夷見聞
——日本民族アイヌ起源説と蝦夷植民地化計画をめぐって——　堅田智子 …… 47

はじめに

平成21（2009）年、東京世田谷に所在する静嘉堂文庫で、幕末から明治を生きた好古家松浦武四郎の実像を具体的に明らかにできる新たな資料が出現した。私たちは、同年より静嘉堂文庫のご理解、ご協力の下これらの資料整理を敢行し平成25（2013）年に目録を出版(註1)加えて静嘉堂文庫美術館での展示によって、このコレクションが世に知られるようになった(註2)。科研費を得て着手した平成22（2009）年の研究当初から掲げている課題として、武四郎コレクションを核として「近代博物館創設の揺籃期において、文化財行政制度の構築に多大なる影響を及ぼした幕末維新期から続く国内外の好古家の活動に関して考究する」ことをあげている。近代博物館制度、文化財保護制度が明治政府の号令一下、瞬時に整えられたかの如く評価されているが、実際には近代以前の学問を身につけた数多の好古家の協力と実践なくして実現できるものではなかったのである。これは、近代博物館形成史、文化財行政史のみならず、揺籃期におけるわが国の人文科学そのものの成り立ちを考える上でも重要な視点と考えたのである。加えて、彼らに影響を与えたハインリッヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold, 1852-1908）等の外国人の存在があった事についても言及し、平成27（2015）年には、國學院大學において武四郎と古物を通じて交流した彼のコレクションや学問形成に大きな影響を与えた父フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796-1866）のコレクションを有するヨーロッパの研究者を招聘し、よりグローバルな視点で明治初期の好古家、文化財を考える国際シンポジウム開催した(註3)。平成28（2016）年には、オランダ・ライデン民族学博物館に収蔵されている　シーボルトコレクションの考古資料調査を敢行、その実像に迫ることが出来たのである(註4)。

これらの研究を踏まえ、平成29年（2017）度から推進している本研究「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」では、日本近世史・日本近代史・ヨーロッパ近代史・ヨーロッパ考古学・中国考古学・日本考古学・博物館学・文化財学等の多様な専門家による研究体制を整え、総合的観点から ① 近世後期の「物産会」から近代博物館制度・文化財行政の構築に到る歴史的・人的基盤を探る。② 好古家蒐集古物の調査研究と国内外における好古家ネットワークの研究を推進している。本発表では、特に松浦武四郎の好古家としての実相に焦点をあて、現在推進している明治以降の武四郎研究の現状について各分担研究者から報告を行うものである。研究組織は、以下のとおりであり、研究活動についてはホームページ（http://hcra.sakura.ne.jp/hvsiebold/）をご覧頂きたい。

平成30（2018）年、生誕から200年を迎えた松浦武四郎は、幕末の北海道を6回にわたって踏査し、さまざまな記録を残したばかりではなく、幅広い方面で多彩な活動を行った。そうした武四郎の多様さの中で、特に明治政府の官職を辞した52歳から晩年に至るまで熱心に行った古物蒐集にスポットを当て、これまで知られることのなかった「好古家」としての武四郎の姿に焦点をあてた研究会を開催した。本書はその内容を完結にまとめたものである。　　（内 川 隆 志 ）

註

(1) 内川隆志編　2015『静嘉堂文庫蔵 松浦武四郎蒐集古物目録』

(2) 公益財団法人静嘉堂　2013『静嘉堂蔵　松浦武四郎コレクション』

(3) 國學院大學博物館　2016『國學院大學博物館国際シンポジウム・ワークショップ2015　博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究報告書』

(4) 内川隆志編　2018『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅰ　平成29年度科学研究費助成事業　基盤研究B　課題番号17H02025

玩物喪志にあらず－好古家松浦武四郎の古物蒐集

内川　隆志

1. 好古家松浦武四郎が生きた時代

明治新政府は、「王政復古」「祭政一致」の理想をかかげ、その実現のため神道国教化の方針を採用し、それまで広く行われてきた神仏習合を禁止するため神仏分離令を発令した。これによって神仏習合の廃止、神体として仏像の使用禁止、神社からの仏教的要素の払拭などが徹底され、仏像・仏具の破壊などの暴挙たる廃仏毀釈運動が起こったのである。特に明治維新を主導した諸藩では強力な廃仏毀釈が行われ、あらゆる仏教美術が破壊された。慶応4（1868）年4月1日、比叡山麓坂本の日吉社へ暴徒が押し寄せ、神殿に侵入、仏像・仏具・経典など124点に及ぶ仏教美術を破壊したのが廃仏毀釈の最初の暴挙である(註1)。薩摩藩では寺院1,616寺が廃され、還俗した僧侶は2,966人にのぼる。そのうちの三分の一は軍属となったため、寺領から没収された財産や人員が軍に回されたと言われ、美濃国苗木藩では、領内の全ての寺院・仏壇・仏像が破壊された。法隆寺に匹敵する寺領を誇った奈良県天理市に所在した永久2（1114）年創建の内山永久寺は、伽藍もろとも完全に廃絶し、寺内にあった仏教美術は、破却、散逸の憂き目にあい、その一部は、今も以下のごとく内外の博物館等に収蔵されている。不動明王像（須磨井植家蔵＝旧藤田家別荘）・小野小町像（藤田美術館）・四天王像4体（東大寺蔵の持国天・多聞天）・康円作四天王眷属像4体（静嘉堂文庫美術館とMOA美術館に分蔵）・康円作不動八大童子像（世田谷観音寺）・頼円及び霊山房筆両界曼荼羅図（藤田美術館）・伝真然筆・藤原定信讃真言八祖像（ベルリン民俗学博物館に流出・第二次大戦で焼失）・藤原宗広筆・両部大経感得図（藤田美術館）・僧光賢筆・亮恵上人画像（昭和16年沼津粟田家蔵）。平等寺（大神神社別当寺）、大御輪寺（大神神社神宮寺）、白雲寺（京都愛宕神社神宮寺）、中禅寺（筑波山神社関連寺院）なども完全に廃寺に追い込まれ、與杼神社宝塔・上野東照宮本地塔・秋葉権現多宝塔・久能山東照宮五重塔・紀州東照宮三重塔・北野天満宮宝塔・石清水八幡宮大塔・鶴岡八幡宮大塔、江島神社三重塔・諏訪大社五重塔（上社）、三重塔（下社）・吉備津神社三重塔・日御碕神社三重塔、多宝塔・足助八幡宮多宝塔・石清尾八幡宮多宝塔・金比羅大権現多宝塔・室明神社多宝塔・天野神社多宝塔・平野熊野神社多宝塔なども破却された。興福寺でも全ての僧侶が神職に就き、自らが仏像や伽藍を破壊し、五重塔は鉄釘採集目的にわずか25円ほどで売りに出されたが、単純に取り壊しによる延焼を恐れた近在住民の反対にあって難を逃れている。廃仏毀釈は明治初年から4年頃まで荒れたが、徐々に民衆の抵抗にあい頓挫していった。

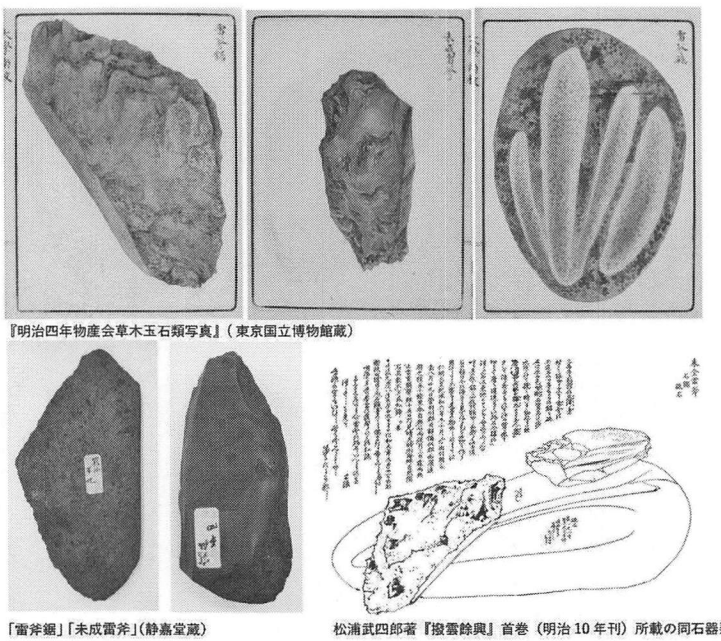
一方、明治4（1871）年8月29日、廃藩置県が決定すると社会は大混乱となり、藩主は一斉に帰国、宏壮な江戸屋敷は空き家となって地価は暴落、屋敷にあった美術品を含む道具類は価値を見出されることなく市中に溢れ出した。公家、諸公、華族に伝来する表道具等の指定資産に

図1　武四郎が記録した熱田神宮の廃仏の様子
『己卯紀行』（明治12（1879）年　佐藤貞夫編　2011　松浦武四郎記念館）

対し、第三者の所有権・質権・抵当権主張を不可能にした明治19（1886）年の「華族世襲財産法」（明治19年勅令第34号）の発令によって沈静化するまで、収拾のつかない状況が続いたのである。

古器旧物の保護へ

明治2（1869）年、明治新政府は旧江戸幕府直轄の高等教育機関昌平学校（昌平坂学問所）を大学とし、これに開成学校（開成所）、医学校（医学所）の2校を分局として統合、同年12月幕府の洋学教育研究機関であった開成学校を大学南校と改称した。これは本郷湯島にあった大学本校の南にあたる神田一橋に位置していたためである。医学所は下谷御徒町にあり、本校より東に位置するため大学東校と称した。町田久成（1838-1897）は、明治3（1870）年大学大丞として田中芳男（1838-1916）と共に大学南校におかれた物産局に勤務し、廃仏毀釈による文化財危機の時勢にあって「抑西洋各国ニ於テ集古館ノ設有之候 ハ古今時勢ノ沿革ハ勿論往昔ノ制度文物ヲ考証仕候要務ニ有之」と記したように明治4（1871）年4月25日、太政官に対し西洋各国にある集古館すなわち博物館の設立をもって古器旧物保護を献言したのである（「集古館設立の献言」）。ここにはじめて、わが国に博物館の必要性が顕らかにされたのである。献言の要点は、① 明治維新以来、宝器珍物などが殲滅に及んでおり誠に遺憾であるため集古館を建設せよ。② 政府が集古館建設不可能のおりには、雑品にいたる物を保護する政策を講じよ。③ 専任者をもって古器物を模写し、記録として集成せよ。ということである。そして、何を保護すべきなのかという点を一般に具体的に示したのが、明治4年5月14日～20日の期間で九段坂上招魂社（現靖国神社）境内で開催した物産会（辛未物産会）である。辛未物産会の最も重要な点は、明治政府の最高学府が主導し広く国民に博覧会の持つ有用性を諭い、一般の出品を求め、「最寄ノ物品」の品には賞を出すなど物品への注意を喚起したことにある。出品物の売買を認めていることも古物などに金銭的価値が厳然と存在することを知らしめ、ひいては散逸、廃棄などを回避させる意図があったことが推測できる。東京国立博物館所蔵の『明治辛未物産会目録』には、部門別、出品者別に総ての品名が記されており、主催者側の町田久成の副官として活躍した蜷川式胤（1853-1882）、柏木貨一郎（1841-1898）など、当時を代表する数多の好古家達がその出品物と共に名を連ねている。ここに出品者の一人としてすでに武四郎が名を連ね、「鸚鵡螺一種巨大者」と共に出品した「雷斧砥」（石皿）「雷斧鋸」（石製品）、「未成雷斧」（磨製石斧未成品）は、『明治四年物産会草木玉類石写真』（東京国立博物館蔵）に彩色挿絵で記録されている（上図）。つまり武四郎は政府が目指そうとしていた殖産興業を目途とした「博物」の啓蒙という新しい試みの最先端に好古家として選ばれていた事を意味している。


『明治四年物産会草木玉石類写真』（東京国立博物館蔵）

「雷斧鋸」「未成雷斧」（静嘉堂蔵）

松浦武四郎著『撥雲餘興』首巻（明治10年刊）所載の同石器類

図2　明治4（1871）年の大学南校物産会に出品された武四郎所有の石器

太政官は、この献言を受けて一月余りで古器旧物保護の方針を明文化し対応した。博覧会直後の明治4年5月23日「古器旧物保存の布告」を発し、保護すべき古器旧物31種の名称一覧が添えられ、

各府県には所管官庁を通じて目録を提出することを命じた。ただし、集古館そのものの建設には触れられてはいない。ここで注目すべきは、この31種が武四郎蒐集古物のカテゴリーのいくつかに概ねあてはまる点である。「古器旧物保存方」の31種の部どうしの関連性は不明ながら、具体的な品々が示された内容は、鈴木廣之が指摘しているように明治初期における好古家の蒐集対象そのものと言えそうである(註2)。

表1は、近世の好事家、好古家が蒐集アイテムとした古物が所載された書籍の内、『万宝全書』(菊木嘉保編　1694年)、『集古図』(藤貞幹　1797年)、『集古十種』(松平定信　1800年)に加え、西洋の目線で新たな価値観を創出したPh.v. シーボルトの蒐集品の数々、大坂堂島の素封家升屋家の蔵品記録である『家蔵記』の所載品、大坂堺の素封家吉田家三代の蔵品記録『聆涛閣集古帖』のカテゴリー(註3)、江戸後期の書家市川米庵の文房具蒐集図録である『小山林堂書画文房図録』の分類、明治4(1871)年の辛未物産会目録の内容、そして幕末・維新期の好古家松浦武四郎の蒐集品を「古器旧物保存方」に掲載された31種の品々と対比したものである。18世紀の後半頃には、中世以来の伝統的な刀剣・武具・銭貨・茶道具・書画といった王道の蒐集対象に加え、瓦や古鈴・玉器といった考古遺が仲間入りし、該期の好古家の蒐集品となっていった事が理解出来よう。Ph.v. シーボルトの蒐集品には、特に新たな視点として家具・調度、農具等の民俗資料が加わり「古器旧物保存方」に反映されている点も興味深いところである。松浦武四郎の蒐集品は、刀剣・武具・茶道具等の王道の蒐集アイテムが含まれない点が特徴である一方、勾玉や銅器等の考古遺物にそれまで信仰対象であってコレクターズアイテムとはならなかった仏像や民具、人形などが加わっている。

2. 好古家松浦武四郎が遺したモノ

好古趣味の萌芽

天保3年(1832)年8月、武四郎満14歳の年に開催された伊勢国射和村(現松阪市射和町)の延命寺で西村広林、竹川竹斎主催の物産会に師の平松楽斎(1792-1852)と共に「紅毛銭二種」(紅毛銭とは欧州の銭貨のこと)を出品。翌年には、本居宣長(1730-1801)が蒐集した鈴を写した図を長谷川元貞(1796-1858)から借りて書写し「古鈴図」を著すなど既に古物好みの片鱗がみて取れる。きわめつきは、武四郎が古物購入の返済に困り、あろうことか師の平松楽斎が大切にしていた火事頭巾を勝手に持ち出し、道具屋に売ってしまう事件を起こしている。これは天保4年(1833)に16歳で家を飛び出したきっかけとなった。

そもそも武四郎は、「蒐集」の人である。満15歳で記録した鈴屋の「古鈴図」をみても、モノへの執着とそれを徹底的に記録するという性分がすでに充分に発揮されていたことを物語っている。生来の癖ともいえる武四郎の「蒐集」はすでに少年春期の頃からはじまっており、市井に下ってから大きく方向転換したように見えるが、主な蒐集アイテムが「コト」から「モノ」に変換され、過去を顧みることを抗うようにモノの世界に没頭していったのである。

蒐めようとしたモノ

例えば武四郎が少年期より拘った古銭に関しては、明治10年台には愛泉家番付で2番目にあがるほどであった。その実力を示す史料として元治2(1865)年、武四郎47歳の自筆稿本であり、和洋の古銭についての緻密な分析が加えられている『昌平宝鑑』や『洋貨図録』等があげられる(石水博物館所蔵)。生涯に亙って蒐めた古銭類の多くは、明治10(1877)年3月21日に大蔵省に三竿分献納した事(明治10年3月24日付朝野新聞)が三浦泰之の研究によって判明している。好古家としての具体的な活動としては、明治元(1868)年12月より毎月21日に自居で「尚古会」を開き、多くの同好の輩と交わる中で、明治6(1873)年頃には、すでに東京において名声を得ていた事が知られている。古典籍に関する造詣も深く、蔵書に関しては神田五軒町に居を構えた明治9(1876)年に、東京書籍館(現国会図書館)と開拓

対象物	元禄7(1694)年 菊木嘉保 『万寳全書』	藤原貞幹 『集古図』	寛政12 (1800)年 松平定信 『集古十種』	文政6(1823)年 安政5(1859)年 P.V. シーボルトの蒐集品	寛政2(1790)年〜 文政9(1826)年 升屋平衛門蒐集品 『家蔵記』	天保12(1841)年 安政2(1855)年 元治元(1864)年 『聆濤閣集古帖』	弘化4(1846)年 市川米庵 『小山林堂書画文房図録』	明治4(1871)年 辛未物産会目録	明治4(1871)年 「古器旧物保存方」	松浦武四郎蒐集古物
武器・武具	古今銘尽合類大全／彫物目利彩金抄	刀剣／矛／鏃／鉄器	兵器	武器・武具類	武具･刀装具類（刀剣･刀装具･馬具等）	弓矢／刀剣／鋒甲／甲冑軍営／旌旗陣営／馬具		古物之部／古鎗／古鐙／古鞍	一、武器ノ部 刀剣 弓矢 旌旗 甲冑 馬具 化戟 大小銃砲 騨丸 戦鼓 孛羅等	烏型柄頭／車軸金具／銅戈／銅鏃／刀子／鉄鏃／鉄矛／刀子／小柄金具／寶珠鍔／鈴杏葉／三鈴環／三鈴杏葉／五鈴杏葉／雲珠／金銅製鐙
古書画	本朝画印伝／唐絵画印伝／和漢墨跡印尽／本朝古今名公古筆諸流／古来流行御手鑑目録并代付	古画	書画／肖像	絵画／浮世絵類	書画（日本画・中国画・蘭画）	肖像／書／雑銘	唐宋元書画／明書画／清書画	雑之部／古画／油絵等	一、古書画ノ部 名物 肖像 掛幅 巻軸 手鑑等	源烈公御詠／讃岐切小幅／焼裂／紫裂／不明／兼好法師書
古物（石器）				石器類（石鏃・石斧その他）	瓦類その他			古物之部／石弩／雷斧／石剣他	一、石弩雷斧ノ部 石弩 雷斧 霹靂碪 石剣天狗ノ飯匙等	石鏃／磨製石斧／磨製石斧／磨製石斧／履／石製摸造品／鍬形石／車輪石／石棒／石錘
古物（鏡・鈴）		古鈴／銅鐸		和鏡・銅鈴その他		鏡／鈴鐸／鐘銘		古物之部／古鏡／古磬他	一、古鏡古鈴ノ部 古鏡 背鈴等	六鈴鏡／和鏡／青銅柄鏡／梵字名鏡／方格規矩八獣鏡／鬼面鈴／桃形鈴／六角鈴／六鈴釧
古物（玉類）		玉器		玉類（勾玉・管玉他）		玉		古物之部／勾玉／管玉	一、古玉宝石ノ部 曲玉 管王 瑠璃 水晶等ノ類	勾玉／管玉／切子玉／丸玉／大珠／金環／銀環／ガラス玉／三輪玉／臼玉 平玉／獣形玉／琥珀玉
古物（瓦類）		瓦器				瓦		古瓦器	一、古瓦ノ部 名物並名物ナラズト雖古キ品	興福寺瓦／硯瓦硯
碑銘		碑銘	碑銘／鐘名			碑銘			一、鐘銘碑銘墨本ノ部 名物並名物ニアラスト雖モ古キ品	
銅器		銅器	銅器	銅器			鼎・壺・爵・鏡	雑之部／古銅器類	一、銅器ノ部鼎爵其他諸銅器類 一、諸金製造器ノ部 銅 黄銅 赤銅 青銅 紫金 鉄 錫等ヲ以テ製造セル諸	獣耳壺／敦／絢紋龍耳罍／兕觥蓋／熨斗
扁額		扁額	扁額	扁額		扁額			一、扁額ノ部 神社仏閣之扁額並諸名家書画ノ額等	
文房具		文房器	文房	文房具類	文房具類(筆･筆立･硯･硯箱･墨･文箱･文鎮・研屏・水滴)	文房	玉璧・墨・硯・筆洗・爵	雑之部／ペン／西洋封じ糊等	一、文房諸具ノ部 机案 硯 墨 筆架 硯屏ノ類	絵硯／伊部硯／猿面硯／敬月硯筆／天正年墨／藤代古墨／蒔絵文箱／蒔絵巴紋様漆箱
印		銅印	印章	印・印材	印・印材	印章		古物之部／古銅印	一、印章ノ部 古代ノ印章類	
楽器			楽器	楽器	楽器類(笛･蛇味線･琵琶・オルゴール他)	楽器	琴		一、楽器ノ部 笛 笙 革葉 篳篥 大鼓 鐘鼓 羯鼓 箏 和琴 琵琶 琴瑟 仮面其他猿楽装束並諸楽器歌舞ニ属スル品	老猿面
古銭	和漢古銭宝銭之図文			貨幣				古物之部／古銭類	一、貨幣ノ部 古金銀古銭並古楮幣等	ローマコイン／和同開珎／永楽通宝銀銭／金銀貨
服飾		服飾／欄席		服飾類（衣服・素材・根付等）	服飾類（衣服類・織物・布地・素材・帯留類･根付･印籠･装身具類）	織紋			一、布帛ノ類 古金襴並古代ノ布片等 一、衣服装飾ノ部 官服 常服 山民ノ服 婦女服飾 櫛簪ノ類 傘笠 雨衣 印籠巾着 履展之類	巾着袋
茶道具・陶器	和漢名物茶入肩衝／和漢諸道具見知抄	食器・磁器		陶磁器	陶磁器	食器／酒器類／茶道具類		陶器之部／多数	一、陶磁器ノ部 各国陶器磁器等	
輿		輿				乗輿			一、車輿ノ部 車 輿 藍輿等	
度量		度量		度量		尺量／升量		雑之部／西洋尺	一、度量権衡等ノ部 秤 天平 尺 斗升 算盤等	枡
書籍				書籍	書籍類／地図類	天地／地図内裏			一、古書籍並古経文ノ部 温古ノ書籍図画及古版古写本其他戯作ノ類ト雖モ中古以前モノニテ考古ニ属スル者等	版木／陀羅尼経
家具・調度				家具	香道具類／花器類／硝子工芸／喫煙道具類／盆石	食品		雑之部／西洋蝋燭／香炉／煙草盆／コーク製炭団他	一、屋内諸具ノ部 屋室諸具 屏障類 燈燭類 鎖鑰類 庖厨諸具 飲含器具 煙具等	一昼敷／渋団扇／煙管
玩具				玩具	玩具類	戯器		雑之部／北海道木彫器物	一、遊戯具ノ部 碁 将棋 雙六 蹴鞠 八道行成 投壺 揚弓 投扇 歌骨牌等 一、雛皺等偶人并児玩ノ部 迫子 天児 雛人形 皺人形 木偶 土偶 奈良人形等其他児童玩弄ノ諸器	双六／聖徳太子像／武者像／猿田彦大明神像／宇須女像／西行法師像／西行法師座像／僧照偏正／田村将軍像／木製鬼面／摩河酒佛像老子像
皮革				皮革製品	皮革製品（巾着・胴乱等）				一、皮革ノ部 各種ノ皮革並古染革ノ紋図	
漆工				漆工	漆工	調度／嚢匣			一、漆器ノ部 蒔画 青貝 堆朱等ノ諸器物	漆箱
仏像・仏具				仏像・仏具／神道関係	仏像・仏具類	仏具／葬具／墓誌		古物之部／仏像	一、古仏像並仏具ノ部 仏像 経筒 五具足 宝鐸等ノ古仏具 一、祭器ノ部 神祭ニ用ル楯矛其他諸器物等	頼朝坊仏／石仏／泥仏／千躰仏／九十九千躰仏／磚仏／鉄仏／泥塔／真鍮製宝塔／土製五輪塔／百万塔／瓦経
農具				農具					一、農具ノ部　古代ノ用品	
漁具				漁具						
模型				機材と道具の模型	模型類			雑之部／綾蘭笠古形模型		
機器類		天文／地理		科学的道具	観測機器類／精密機器類／実験機器類／医療機器類			測量究理器械之部／雑之部	一、工匠器械ノ部	
標本類		餅（神饌）／鳥魚／草木		鉱物／化石／動植物・鳥類・甲殻類・魚類・貝類標本	鉱物／化石／動植物・鳥類・甲殻類・貝類標本		石	鉱物門化石之部／鉱物門／土石之部／植物門／動物門／活獣之部／動物門／鳥之部／魚之部／活魚／介之部／虫之部／爬虫類之部	一、化石ノ部 動物ノ化石並動物ノ骨角介殻ノ類	石螺／北海道浦川産／鸚鵡螺一種巨大者（明治4年物産会に出品記録）

表1　近世、近代初期における古物蒐集アイテムと「古器旧物保存方」の内容

使（現在は北海道立文書館所蔵）に納本されている。

生涯に亙って蒐集した古物は、膨大な量に及んだことが推定され、現在行方が判明しているのは静嘉堂、松浦武四郎記念館、国際基督教大学、前田育徳会等に収蔵されており、その内容に関しては、ほぼ把握できている。これら蒐められたモノや自書や自筆稿本等の文献記録からアイヌ関連資料を除く武四郎の古物蒐集の動機を推定すると以下のような分類が可能であろう。

○ 近代以前から続く好古家の蒐集品（『訪古遊記』所載の藤貞幹（1731-1797）の分類）
　珍蔵（主に古代文化資料）　古典籍・古文書・古銭・古瓦・金石文拓本・古器物
　（土器・勾玉・青銅器・玉器等の考古遺物）
　秘玩（日用品中の愛玩品）　硯・水滴・筆架・鎮子・印匣・如意・扇
　（書画等）
※　菊木嘉保編『万宝全書』13巻13冊（元禄7（1694）年刊）に所載される刀剣類・茶道具の類は、武四郎の蒐集対象にほぼなっていない。
　鈴の蒐集に関しては、少年期からの「鈴屋」への憧れが直接影響しているだろう。
○ 信仰（神仏崇拝 / 天神信仰 / 富士・大峯信仰などに関連するモノ）
　（仏像・神像・天神画・観音画・甲斐の黒駒）
○ 歴史上の人物に関連するモノ
　（聖徳太子 / 坂上田村麻呂 / 柿本人麿 / 西行法師等）
○ 廃仏毀釈で壊された歴史的建造物への思い
　（一畳敷）
○ 著名人のサイン（渋団扇）
○ その他

蒐集古物の概要

〈静嘉堂蔵品〉

静嘉堂資料は、総数874点を数え、箱1「馬角 / 奇彩千秋 / 霊光萬古」、箱2「土華剥蝕 / 天地含章 / 朱翠鮮新」、箱3「東至宝 / 皇和宝銅 / 千古観光」、箱4「寵仙」、箱5「大雄小窟」、箱6「静壽」と墨書された6つの箱に収納されている古物。単独の箱に収納されている古物、箱無しの状態で保存されている古物に分けることができる。

箱1「馬角 / 奇彩千秋 / 霊光萬古」は、正面中央に墨書で「馬角 / 奇彩千秋 / 霊光万古」と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「第百五十八号 / 勾玉 / 各種」と記され、蓋裏には勝海舟（1823～1899）、小野湖山（1814～1910）の揮毫による「明治庚辰仲冬為 / 北海翁之属〔勝海舟〕/ 海舟散人［印］［印］/ 湖山酔翁長愿題［印］［印］」が記される。上段の引出には、正面右端に「神世 / 瓊瑤」後ろ側面には、書家松田雪柯（1823～1881）による墨書「明治十三年庚辰 / 十二月二十八日為 / 北海老先生題〔松田雪柯〕松元修如鶴氏」が施される。下段の引出には、正面右端に「まか玉・くたゝま」後ろ側面には、茶人三田葆光（生年不詳～1881）の揮毫〔三田葆光〕「平葆光書」が認められる。中には、武四郎唯一の肖像写真（明治15年撮影）に首に架けられている「大首飾」や明治9（1876）年に豊後島津家より購入した見事な琅玕翡翠の勾玉一連など、主に玉類が収納されている。蒔絵鏡葉に収納され琅玕翡翠勾玉が収められる仕覆は「武四郎涅槃図」の樹上に描かれる。箱書の「馬角」は、武四郎の雅号、「奇彩千秋」とは永年かかって蒐めた珍しい彩り、「霊光万古」とは遠い昔から霊妙な光を発するもの（玉）という意味であろう。

箱2「土華剥蝕 / 天地含章 / 朱翠鮮新」は、正面中央には墨書で「土華剥蝕 / 天地含章 / 朱翠鮮新」

と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「銅五十四号 / 天地含章 / 古鏡類入」蓋裏には「明治庚辰長至後三日為 / 北海翁雅属(巌谷一六)古梅巌谷修題（印）［印］光緒六年冬日河凍為　北海翁題(楊守敬) 楊守敬［印］」とあり、巌谷一六（1834～1905）と清の学者楊守敬（1839～1915）による揮毫、捺印が施される。上段の引出正面右端に「六鈴鑑 / 九獅鐃鑑 / 蟹帯鑑 / 黄楊不図章」後ろ側面には、書家市河万庵（1838～1907）による揮毫(市河万庵)「万菴兼書」が施される。右手の引出正面右端に「銅章戚」、後ろ側面には、松田雪柯（1823-1881）による揮毫「明治十三季庚辰十二 / 月題松元(松田雪柯)修如鶴氏 / ［印］［印］」が施される。下段の引出正面右端に「大刀頭 / 軓 / 戈」後ろ側面には、木村二梅による揮毫「大刀頭軓戈五字(木村二梅) / 二梅題［印］」が施される。本来最上段には引出があり、その前板に部材のみが残存しており前面には墨書で「長 / 宜 / 子 / 孫」、裏面には、楊守敬による墨書「光緒 / 庚辰 / 長至 / 後三日為 / 北海 / 題(楊守敬) / 守敬［印］［印］」が認められる。中には、中国や古代ローマの青銅器、コイン、古墳時代の六鈴鏡や和鏡が収められる。大きく箱書された「天地含章」は世界の兵器を意味する。

箱3「東至宝 / 皇和宝銅 / 千古観光」は、正面中央には墨書で「日東至宝 / 皇和宝銅 / 千古観光」と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「銅五十五号 / 皇和宝銅 / 古鈴類入」と記されている。蓋裏には、楊守敬による揮毫「明治辛巳春二月十六日 / 北海老人嘱(日下部鳴鶴) 題東作［印］［印］ / 辛巳秋八月下澣(永井盤谷) / 盤谷樵者永井喜暉題［印］［印］ / 光緒辛巳観 / 北海翁所 / 蔵日本古銅器数十事 / 当為木瀛好古之最 / 荊南楊守敬(楊守敬)記之」が認められる。中には、古墳時代の鈴杏葉や八角鈴などの鈴にまつわる青銅器を中心に、古墳時代の石製模造品の履、アメリカやフランスの新石器時代の石器などが収められる。箱書きの「日東至宝」は日当すなわち日本の至宝を指し、「皇和宝銅」は、日本の銅（製品）の宝物、「千古観光」とは遠い昔を見てまわるという意味か。

箱4「寵仙」は、正面中央には墨書で「寵仙」と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「第百八十一号 / 石器類 / 各種」と記され蓋裏には小野湖山（1814-1910）によって「明治壬午冬至後一日(小野湖山) / 湖山老人長愿題 / ［印］［印］」が揮毫される。中には古墳時代の石製腕飾類や縄文時代の石器類、枡などが収められる。「寵仙」の語意は解せないものの「寵」意味からして武四郎にとって特別に大切なものが収められていたのか。

箱5「大雄小窟」は、正面中央に、山岡鉄舟（1836-1888）の揮毫で「明治十五年二月十九日 / 大雄小窟(山岡鉄舟) / 鉄舟居士書［印］」と記され、右端上部に角切を施した白紙の付箋に「第百七十二号 / 仏躰 / 各種と記される。中には仏像や泥塔などの仏教美術関連資料や人形関係の資料が収められ、頼朝坊仏、石仏、磚仏、木造地蔵菩薩立像、真鍮仏、古代エジプトのシャプティ、木造聖徳太子像、木造武者坐像、土人形の猿田彦大明神像や宇源女塑像は、河鍋暁斎（1831-1889）の手による「武四郎涅槃図」の案上に描かれる。「大雄小窟」とは、大雄（マハービーラ）は「偉大な英雄」の尊称で、小窟は小さな岩屋即ち箱を岩屋に見立てた偉大な英雄（仏像や人形類）の住居か。

箱6「静壽」の主箱蓋裏書きには川田甕江（1830-1896）の揮毫によって「松浦翁収蔵古研 / 尚邦産而不尚異 / 産比雖瑣事可以 / 見其用意之厚矣 / 明治壬午冬甕江(川田甕江)老漁嘲題」、白紙の付箋には「文百三十七號 / 静壽 / 硯墨類」（印）（印）」と記される。「静壽」は『論語』雍也第6・143「子曰、知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者静。知者樂、仁者壽。」の仁者の好む「山」を除く「静壽」を意味するものと思われる。中には硯や墨筆といった文房具類が収められている。

〈松浦武四郎記念館蔵品〉

「古器縦覧」静嘉堂蔵品とほぼ同手の仕立ての木箱には、小野湖山の揮毫があり、中には和同開珎や永楽通宝等の泉貨、銅鏃、鍔等の武器類、奇石、讃岐裂小幅等が収められている。その他単独の箱に収まる妙楽菩薩や玉類、書画等274点が知られている。

〈国際基督教大学〉

武四郎が人づてに日本全国91ヶ所に及ぶの神社仏閣、歴史的建造物などの古材を蒐め、明治19年(1886)に竣工した「一畳敷」が流転の末、同大学内に存在する(註4)。

〈前田育徳会〉

武四郎旧蔵で国内唯一の古代中国の玉璧を所蔵する。箱裏には小野湖山の揮毫で「文政元年戊寅二月日向国那珂郡／今町村農佐吉所有地朝王之山堀／出石棺中所獲古玉古鐵器三十餘／品之一蓋日向上古之遺蹟多実／所謂王之山亦必非尋常古塚也」と記される(註5)。

3. 晩年の旅に垣間見える文化財保護思想

晩年、武四郎は特に西日本への旅を繰り返し、好古家との交流や天神社への銅鏡の奉納、大台ケ原の探査などを実施し自筆稿本として残している。現在、佐藤貞夫氏らによって翻刻出版され松浦武四郎記念館から刊行されている(註6)。ここに残された明治12（1879）年から20（1880）年に至る稿本類の詳細な検討は、武四郎自身の好古家としての文化財保護の姿勢や、各地の好古家との交流を明らかにする極めて重要な手がかりを与えてくれる。

例えば、明治12（1879）年3月16日から5月30日の旅では、静岡で医師・好古家の柏原学而（1835-1910）を訪問後、愛知で、盛田久左衛門命祺（1816-1894）（ソニー創業者・盛田昭夫の曽祖父）、中埜又左衛門（ミツカングループの創業家）、大阪では堺県令の税所篤（1827-1910）　や富岡鉄斎（1837-1924）、藤田伝三郎（1841-1921）等と旧交を温め彼らが所有していた勾玉等の考古遺物を多数実見しスケッチとして詳細に記録している。この旅で特に注目すべきは、4月22日に税所県令に語った明治8年に、東大寺二月堂で呼び止められた老人の話である。

「早天手向山八幡宮に参詣。其より二月堂に参る。未だ会場にも不相成より其辺散歩致せし時に、七十余の老人庭を掃き、木陰に縁台を置き、是に朝茶の小瓶を持来し、我が散歩せしを見て我が国を聞。彼是四方山の話を致して二月堂の下、俊乗堂の軒、大仏回廊の傍等に家材の多く積有を其ゆへを問ひしに、老人答えていえるに是は八幡の大塔今後神仏混合御禁じに付毀れたれるを、百円の金を以て、当所より買受、淀川橋まで出し置かば、日々乗船の上りの者二、三本づゝ皆木津の渡し場に持来り、陸上げ致しをまた日々の駄賃馬、当所え運び呉たる成。依て是を幸に当社は多宝塔の地礎も有之候間、右の建築仕候と信者一同懸り候へば、県庁よりさし留られ候。依て此処に空しく貯置る由申に付、左候はゞ凡其開金何程にて出来候哉申候に、凡三千円と申候由。故に我考ふる処、是三千円と申候て五千金は懸るべし、五千円にて出来候。何卒一事には再建致し度ものと申せしに、老人曰く五千円の金子には決て寄付人も可有り候得ば、奈良県にて此事相拒み候て不出来由。余曰く奈良県にて拒み候はゞ東京にて何とか工夫も可有。とにかく再会も暇を乞て場中に到るに、県の中属稲生直護に此事を談ずるに、其頃にては拒みも

税所県令に明治8年に二月堂で呼び止められた老人の話をする
明治12（1879）年4月22日『己卯記行』
『己卯紀行』（明治12（1879）年　佐藤貞夫編　2011松浦武四郎記念館）

仕候得ども、当時にては決て右より曳、拒み候者無し。もし御意有之はゞ、凡の積り方致し見仕はんとの義に付分れ、帰府候処、後、稲生氏よりの便に、五千円に候はゞ大丈夫再建出来候也との義にて尚又亥年年再会調を大工方に積り書催促致し、我も金円催可有。蔵銭を朝廷に献納一千二百円頂戴、其上是ゝにと五千円の工風相付居候処、其年秋に及、木材追々博覧会の檻、足場等に遣い紛失致し、種々の入用書上五千八百円に九輪の代価、銅にて千円、鉄にて七百円、其外地所等云に凡一万円にも相成候由、積り書参候間左様に候はゞ。全くの仕上げは凡一万五千円も懸り候由との義に付、右積書を知恩院徹定教正に見せ、当時東大寺は知恩院の配下にも相成候事故、何卒此事教正御発起にも相成候へば、私義五千円の金子奉納度仕度由申候に、教正其節は大に悦び、左候ば必ず再建可致と諾約有。其後しばらく過ての言に右大塔、東大寺に再建被存候へ共、知恩院に塔無が故に右をとり相致し、知恩院に取よせ立度由被答候。依て我いへらく知恩院は何ぞ我等の奉施を仰給ふ事あるべからず。其末流一万余寺にも及。一ヶ寺直末一円づゝ寄付を被仰付候はば、右大塔再建なるべし。東大寺こそ無檀、無末寺にて今は無碌、依て私の微力ものたりとも、浄貨奉納も可仕御懸に有んと申す。其後尚又奈良の方へ様子聞合せ候処、右材追々《(俊乗）坊堂には売払、今は纔博覧会にて置場等に遣有候材木のみ残り居候と申越、其残念やる方なかりし也。此材木纔一年不満にして何れへか行。是は激定教正より此事を寺に問合せに成し故に、もし此塔材を知恩院に取返候はゞと存候て、《脱》（俊乗）坊売払ひしとの風聞なり。」

廃仏毀釈の際、石清水八幡宮の大塔が取り壊された際に、武四郎に語りかけた老人がその廃材を買い取り、木津川を経て二月堂の下、俊乗堂の軒、大仏回廊の傍等に積み置いている話を聞いて老人に賛同し、大塔の再建を県令に打診している下りである。とりわけ壊された大塔に思いを寄せ、その再建を心から願う心中を吐露した内容と言える。

5. 好古家松浦武四郎研究推進における課題

『静嘉堂文庫蔵 松浦武四郎蒐集古物目録』刊行後、個々の古物の学術的評価に関する調査研究は概して進展していないものの、古墳時代の青銅器に関する論考[註7]や武四郎が身につけた大首飾りの評価[註8]などがある。古物蒐集をめぐる好古家ネットワークの研究に関しては、平成19（2007）年以降、笹木義友、三浦泰之、山本命らによって研究が進展し多数の論考が発表され、その実相が明らかとなってきた。例えば江戸後期に東海道吉原宿の脇本陣を務め、画家としても活動した鈴木香峰（1808～1885）に対し、書家市河万庵が入手した「頼朝仏」の斡旋依頼や、旧幕臣、医家で、かつ好古家でもあった静岡の柏原学而（1835～1910）との交流の話題などを調査した論考[註9]や村落指導者層・豪農の家に生まれ、好古家としても知られた根岸武家（1839～1902）に「土偶人」や「古金銀」の購入斡旋、ハインリッヒ・フォン・シーボルト主催の「古物展覧会」や武四郎が毎月、自宅で催していた「尚古会」に関する話題等が記された書簡などの調査[註10]、筑後旧秋月藩士で、現在の福岡県福岡市で古書・骨董商を営み、国学者、郷土史家、社会教育事業家などの側面ももつ江藤正澄（1836～1911）の資料群を調査し、「〇探幽翁の白衣観音ノ大幅松浦武四郎に借取されし事」など武四郎の強引な蒐集にまつわる事実をあきらかにした論考[註11]などがメンバーの研究によってあきらかにされている。これらの他にも関西大学博物館が所蔵する資料から明治6（1873）年開催の博覧会の内容から武四郎に触れた論考[註12]などもある。

今後、好古家武四郎研究において推進すべき課題として、① 個々の古物における学術的評価に関する調査研究 ② 武四郎を取り巻く内外の好古家ネットワークの具体相の究明 ③ 自書、稿本類の詳細な検討の必要性などがあげられよう。

註

（1） 柴田道賢 1988『廃仏毀釈』pp.122-125

（2） 鈴木廣之　2003『好古家たちの19世紀』吉川弘文館　P43

（3） 正木直彦　1932「聆涛閣集古文書と集古帖」『美術研究』4

（4） ヘンリー・スミス　1993『泰山荘　松浦武四郎の一畳敷の世界』国際基督大学博物館湯浅八郎記念館

（5） 本郷泰道　2008「玉璧と松浦武四郎を結ぶもの」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第4号 pp.66-70

（6） 松浦武四郎が記した自筆稿本)、『庚申紀行』(明治13(1880)年)、『辛巳紀行』(明治14(1881)年)、『壬午紀行』(明治15(1882)年)、『癸未溟誌』(明治16(1883)年)、『甲申日記』(明治17(1884)年、『乙酉紀行』(明治18(1885)年)、『乙酉後記』(明治18（1885）年)、『丙戌前記』(明治19（1886）年)、『丁亥前記』(明治20（1887）年)、『丁亥後期』(明治20（1887）年（何れも、編集 佐藤貞夫「武四郎を読む会」、発行松浦武四郎記念館から平成23年～平成29年にかけて刊行）ここには、武四郎が訪問した好古家やその土地ゝで見聞きした古物や社寺等の文化財に関して月日、場所、接点をもった人物あるいは文中に記された人物、内容、挿図を加え詳細に記録されている。

（7） 内川隆志・村松洋介　2012「静嘉堂文庫所蔵　松浦武四郎旧蔵資料の人文学的研究（古墳時代　金属器編)」『國學院大學考古学資料館紀要』第28輯

（8） 内川隆志　2015「松浦武四郎の大首飾りについて」『國學院大學博物館研究報告』第31輯

（9） 三浦泰之・山本命 2011「東海道吉原宿の脇本陣鈴木香峰と松浦武四郎」『松浦武四郎研究序説』笹木義友 p197

(10) 三浦泰之　2011「武蔵国の「好古家」根岸武香と松浦武四郎」(『松浦武四郎研究序説』笹木義友 p237

(11) 三浦泰之・山本命　2012「筑前国の「好古家」江藤正澄と松浦武四郎―江藤正澄『遺憾録』を中心に―」『北海道開拓記念館研究紀要』第40号　北海道開拓記念館

(12) 徳田誠志　2011「旧神田孝平所蔵石棒について―明治6年開催「博覧会」の意義」『関西大学博物館紀要』第17号　pp.17-36

好古家松浦武四郎のネットワークと人物像

三浦　泰之

はじめに

明治前期は、東京を中心にして全国各地で数多くの「好古家」が活動した時代であった。好古家とは、「古物」の愛好家、蒐集家、研究家を意味した同時代の呼称であり、古物とは、美術品、考古遺物、文化財、骨董品などと現在の価値基準で呼び分けられる以前において“古い物”全般を意味した、やはり同時代の呼称である。

好古家たちは幅広い交友関係を築いて、大小さまざまな古物展覧会の開催などによって互いの蒐集品に関する情報を共有し、また、全国各地の好古家や神社仏閣などが所蔵する古物の情報を交換したり、時には、古物自体の売買や贈与・譲渡も行っていた。

そして、松浦武四郎も、そのような好古家の一人であった。本稿では、好古家としての武四郎が築いたネットワークや、好古家という切り口から垣間見える人物像について紹介する。

第１章　好古家武四郎のネットワーク

武四郎は、明治15年（1882）に出版した蒐集品図録『撥雲余興』二集にある「古鐙之図」の解説の中で、「我か古物好ミ」は菊池容斎（1788～1878）の「勧め」による、と記している。容斎は、画家で、有職故実家としても知られた人物である。しかし、「勧め」られた時期は不詳で、いつ頃から本格的に古物の蒐集を始めたのか定かではない。ただ、三重県一志郡須川村（現三重県松阪市）の実家へ明治６年（1873）２月頃に送ったと推定される書簡に「僕無手ニ而遊ひ居候而、天下の名品なり古器・古書画・古銭・古金銀等をあつめ遊ひ居候も、全く世の中の情を知居候間、此暮し出来候也、当時古銭は日本ニ而三人目位ニ相成候、古金銀も東京ニ而名を上け申候」（三雲町史編集委員会2000年、588頁）と記しており、遅くともこの頃には、好古家として東京で名を上げていたことがわかる。

また、明治元年（1868）12月21日から、毎月21日に、自宅で「尚古会」という好古家の集まりを開いていたことも知られる（明治７年（1874）５月22日付の前野六之丞宛て武四郎書簡、三雲町史編集委員会2000年、337頁）。例えば、明治８年（1875）12月21日に催された尚古会には、明治政府の博物館・文化財行政に関与した蜷川式胤(1835～1882)や柏木貨一郎(1841～1898)、出版人で文人の福田鳴鵞(1817～1894)、国学者で法制史家の横山由清（1826～1879）などが参会し、「燋斗」「威斗」（古代中国の青銅器）などを披露し合っている（明治８年（1875）12月21日付の根岸武香宛て武四郎書簡、埼玉県立文書館所蔵根岸家文書4643／笹木・三浦2011年、245～246頁）。武四郎は、このような集まりなどを通じて、好古家としての幅広い交友関係を築いたと考えられる。

好古家武四郎の東京における交友関係を示す一例として、静嘉堂所蔵の松浦武四郎コレクションの“箱書”がある。武四郎は、自身の蒐集品を几帳面に専用の木箱に入れて収納していた。そして、その箱には、例えば、「奇彩千秋／馬角／霊光万古」「明治庚辰仲冬為／北海翁之属／海舟散人／湖山酔翁長愿題」といったように、やはり古物に関心のあった友人・知人から書を揮毫してもらっているのである。その主な筆者と揮毫件数を列挙すると、以下の通りである（内川2013年に収録のデータより）。

巌谷一六（1834～1905／書家）３件、
小野湖山（1814～1910／漢詩人）９件、
大槻如電（1845～1931／文筆家）１件、

市河万庵（1838～1907／書家）15件、
岡本黄石（1811～1898／旧彦根藩家老・漢詩人）1件、
勝海舟（1823～1899／旧幕臣）1件、
木村二梅（生没年不詳／書家）1件、
日下部鳴鶴（1838～1922／書家）2件、
三田葆光（1824～1907／旧幕臣・歌人）1件、
高林二峰（1819～1897／書家）2件、
永井盤谷（生没年不詳／書家）3件、
中井敬所（1831～1909／篆刻家）1件、
益田香遠（1836～1921／篆刻家）1件、
松田雪柯（1823～1881／旧伊勢神宮祠官・書家）3件、
向山黄村（1826～1897／旧幕臣・漢詩人）2件、
山岡鉄舟（1836～1888／旧幕臣）1件、
楊守敬（1839～1915／清国駐日公使の随員・金石学者）5件、
鷲津毅堂（1825～1882／儒学者）1件、
渡辺小華（1835～1887／三河国田原藩家老・画家）1件、

幕末期から明治前期に活動した書家、漢詩人、学者など、著名な顔ぶれが揃っている。当時、さまざまな分野の人びとの中で“好古”に対する関心が高まっていたこともわかる。とりわけ、複数回にわたって登場する小野湖山は、明治6年（1873）に東京神田五軒町の居宅を共同購入するなど、武四郎とは距離的にも親しい間柄にあった。

また、晩年の武四郎は、毎年のように、数か月間に及ぶ西日本への旅を繰り返した。その多くは、北野天満宮・太宰府天満宮などへの大神鏡の奉納、大峯奥駈修行の挙行、後醍醐天皇や菅原道真にゆかりの旧跡への参詣、大台ヶ原の登山など、武四郎の信仰や国学的思想に導かれての旅であったが、その道中で各地の好古家を訪ね、古物談義を交わして所蔵品を見せてもらうことや、古物を蒐集することも大きな目的であった。そのような旅の中で知り合った好古家として、福岡の国学者で古書・骨董店を営んでいた江藤正澄（1836～1911）、山口の郷土史家近藤清石（1833～1916）などがいる。また、西日本には、幕末期に尊王攘夷運動に身を投じていた際に知り合った京都の儒学者で医者の畑柳坪（生没年不詳）など、同じく古物に関心を寄せる旧知の人びともいた。このような西日本における交友関係を中心にして、明治19年（1886）に完成した畳一枚の書斎「一畳敷」の部材となった古材の蒐集が行われたのである。

第2章　好古家武四郎に対する人物評

以下では、武四郎と同時代を生きた好古家による武四郎評をもとに、好古家武四郎の人物像を具体的に掘り下げてみたい。

①内山作信の評価

埼玉県横見郡久米田村（現埼玉県比企郡吉見町）の豪農内山作信（1816～没年不詳）が明治13年（1880）4月30日付で埼玉県比企郡番匠村（現埼玉県比企郡ときがわ町）の医者小室元長（1822～1885）へ宛てた書簡の中に、以下のような一節がある（埼玉県立文書館所蔵小室家文書140「内山手簡」所収／三浦2011年、20～21頁）。

近時好古器物之書ニ而は撥雲余興宜敷由ニ付一帖取入置候、御蔵書中、若無御座候ハヽ御申越次第指上可申、御慰ニ御覧可被成候、

「近時好古器物之書」として「撥雲余興宜敷由」ということで「一帖」入手したこと、もし「御蔵書中」になければ差し上げること、を記している。そして、実際、内山は、同年5月21日付の書簡に添えて、「馬角斎茶ノ記」と一緒に送付している（前掲「内山手簡」所収／三浦2011年、21～22頁）。「撥雲余興」とは、武四郎が明治10年（1877）に刊行した蒐集品図録のことで、「馬角斎茶ノ記」とは、東京神田五軒町の居宅の新築普請を行った際、その落成記念として明治9年（1876）6月4日に催した古物展覧会の図録『馬角斎茶余』（同年刊行）と思われる。武四郎の出版物をめぐり、この両者の間でどのような意見が交わされたのかは不明であるが、この当時、好古家の間で『撥雲余興』が「宜敷由」として評判になっていたことがうかがえる。なお、内山も小室も、武四郎との直接の交友は確認されない人物である。

②畠山如心斎の評価

東京浅草の骨董商畠山如心斎（1830～1883）は、明治13年（1880）6月30日付で小室元長へ宛てた書簡の中で、好古家としての武四郎の活動について批評を加えている。その一節を以下に引用する（埼玉県立文書館所蔵小室家文書25「畠山手簡」所収／三浦2011年、22～24頁）。なお、畠山も、武四郎との直接的な交友の様相は不明である。

一、松浦武四撥雲余興御一覧之処、開巻第一ノ田村丸像鎧ハ打掛鎧ト被思召候よし、御至当ノ事ニ御座候、則右ガ所謂打掛鎧ト申物ニ而、上世普通ノ胴鎧ニ御座候〈打掛ヨロヒトハ着法ニ就テ後世ヨリ付シ名、上世ニテハ是モ唯ヨロヒトノミ云ヒシナラン〉、右巻中ノ奇品多ニ付、同氏の為人ヲ粗御推考之御様子恐入タル御眼力ト可申、〇抑東京中、仮ニ古物家ト称スル翫弄物品家目今百名ニも近カルベク候処、独其名皇国一般ニ轟ク者同氏ニ限レリ、其故ハ何ゾヤ珍品奇物ヲ非凡ニ多ク取集、随而屡上木ヲ意トシ、加ルニ北野天満宮、東叡山中東照宮ノ如キヘ献鏡等ノ名聞ヲ旨トシ、且昔年北地開拓ノ功ヲ唱ヘ、人ニ対スル毎ニ己が貯蔵ノ多数且珍奇世上ニ冠タルノ由縁ヲ懇ニ解明スヲ常トシテ、人ヲシテ先驚カシメザル事無キニ依テ也、但、同氏ノ珍奇ヲ多数際限モナク取集ルヤ、全ク己尚古ノ為ニモ非ス、又真ニ古物ヲ観ルヲ楽トスルニモ非ス、又世ノ有益ヲ計ルニモ非ス、又目利ノ為ニ知ラズ／＼物ニ溺ルヽニモ非ス〈元来目ハ余リ利カズ、故ニ物ニ衆評ヲ得テ而後ニ非レハ用捨モ決セザル人也〉、唯内ニハ利是計り、外ニハ名聞是計ノミ、故ニ其集得ル処ノ物々賊ニ類スルノ所行ニ渉り、夫等ノ息声年ヲ逐甚敷ニ至リ、卑生等ノ同好ハ内心席ヲ同フスルモ快シトセザルガ如シ、同氏ニ限ラズ概シテ是ヲ云バ、昔年ヨリ普通古物家ハ盗賊ノ余派ナルノミ、此ヲ以余輩ハ常ニ普通ノ古物家ト目算セラレンコトヲ深ク恥ルノミ〔後略〕

まず、畠山は、東京には「仮ニ古物家ト称スル翫弄物品家」が100名近くいるが、「其名皇国一般ニ轟ク者」は武四郎ただ一人である、と記している。その理由として、「珍品奇物ヲ非凡ニ多ク取集、随而屡上木ヲ意トシ、加ルニ北野天満宮、東叡山中東照宮ノ如キヘ献鏡等ノ名聞ヲ旨トシ、且昔年北地開拓ノ功ヲ唱ヘ、人ニ対スル毎ニ己が貯蔵ノ多数且珍奇世上ニ冠タルノ由縁ヲ懇ニ解明スヲ常トシテ、人ヲシテ先驚カシメザル事無キニ依テ也」、つまり、古物を「非凡」に数多く蒐集し、しばしばその図録などを「上木」（出版）していることや、北野天満宮などへ大神鏡を奉納したことに加え、「昔年」の「北地開拓ノ功」を語ったり、蒐集品の「由縁」を懇切丁寧に解説したりすることで人を驚かせていること、を挙げている。ただ、その後に続く武四郎評は厳しく、武四郎が古物を蒐集するのは、「尚古」（古い出来事の考証）のためで

もなく、「真ニ古物ヲ観ルヲ楽」しみとするためでもなく、「世ノ有益ヲ計ル」ためでもなく、「目利」のゆえに（鑑定眼があるがゆえに）「知ラズ／＼物ニ溺ルヽ」からでもない、ただ、「内ニハ利」ばかりで「外ニハ名聞」ばかりである、としている。鑑定眼についても、「元来目ハ余リ利カズ、故ニ物ニ衆評ヲ得テ而後ニ非レハ用捨モ決セザル人也」と、もともと目利きではなく、その古物が多くの人びとの評価を得た後でなければ蒐集をしないと断言している。さらに、蒐集に際しては「賊ニ類スルノ所行」があって、その悪評が年々甚だしく、「卑生等ノ同好ハ内心席ヲ同フスルモ快シトセザルガ如シ」とも記している。この畠山の批評を鵜呑みにし得るかどうかは慎重に検討する必要があるが、好古家としての武四郎の評価には、同時代的に毀誉褒貶が相半ばしていたことはうかがえる。

ちなみに、畠山は、武四郎評に続けて、この当時の好古家の人物像について「上等」「中等」「下等」に区分して批評を加えている。まず、「上等」として、「尚古又考古ノ為ニ古物ヲ集ムルニ金ハ其売ル者ノ望ニ任セ、又、敢テ他人ノ愛蔵ヲ得ント思フ事ノナキ等」を挙げ、このような好古家には鑑定眼がなければ「考証ノ為」にもならないが逆に「鑑定家」は少ないとしている。次に、「中等」として、「考古ノ志ハナケレトモ金力アル故ニ何デも人ニ勝リタル物ガ欲シサニ無雅夢中デ古物ヲ貯フル者」や「唯古物ヲ翫ベハ心ニ楽シク思フ癖アリテ古物ニ金ヲ費スヲ不厭者」を挙げ、このような好古家は賞すべきではないが「世ノ害」にはならないとしている。最後に、「下等」として、「相応ニ目モ利、金力モアリナガラ他人ノ愛翫ヲ強テ割シメ、且、価ヲ手痛くシボリテ朝ニ一物ヲ買ハ夕ニ売テ利倍ヲ観ルヲ常トスルガ如キ」や、「金力」「職務ノ権」「鑑定ノ眼」「尚古ノ癖」「諸県ヲ歴覧ノ幸」があって「自然ニ古物ノ集リ来ルヨリ古物家先生ト世ニ称」せられているにも関わらず「他人ノ親愛スル処ヲ無理ヤリニ持テ逃ル様ニシテ終ニ吾所有物トナシテ人ニホコ」ったり「此麁物ヲ出シテ彼珍物ヲ得ルヲ手際」とするなどの人物を挙げ、このような好古家が多いことを嘆いている。

畠山による人物評は、その好古家がどのように古物を蒐集しているのかということに力点を置いてなされている。このことは、この当時、あの手この手で熱心に古物を蒐集しようとする好古家がいかに多かったかを物語っている。

③福田循誘の評価

古典籍収集家の林若樹（1875～1938）は、明治43年（1910）12月4日に東京深川の本誓寺の住職福田循誘（1849～1915）を訪ね、明治前期における好古家の動向などについて聞き取りをしている（『若樹随筆』174～184頁）。循誘自身も、林が「上人古銭を好ミ現時斯界の古老たり」と記すような好古家であったが、武四郎との具体的な交友は不詳である。ただ、循誘の師で浄土宗管長も務めた福田行誡（1809～1888）は、『撥雲余興』二集に序文を寄せるなど、武四郎と古物を介して交友した人物で、行誡の紹介で面識のあった可能性は考えられる。

循誘が、武四郎について林に語ったのは、柏木貨一郎をめぐる逸話である。柏木は、例えば、内山作信が明治11年（1878）11月29日付で小室元長に宛てた書簡の中で「方今松浦武四郎〈素開拓使判官、当時非役ナリ〉を継タル本州第一之好古家ニ可有之〈鑑識トいへ、蓄蔵トいへ〉」（前掲「内山手簡」所収／三浦2011年、19～20頁）と記したように、好古家として著名な人物の一人であった。

> ○四十三年十二月四日夕、岡田村雄氏と同行深川本誓寺ニ福田循誘上人を訪ひて聞き得たるもの左の如し〔中略〕
> 柏木貨一郎といへる人はわれ独知つたふりをする人にて何を持ち行くも中々感心せす、いつか一ツ其鼻を折り呉れんと思ふハ誰れも考ふるニて〔中略〕
> 柏木氏ハ松浦多気四郎翁をさん／＼ニ悪口し彼著撥雲余興なと徹頭徹尾罵倒し居たり、これには何か

原因かあらんと探りしに、案の如く、松浦か撥雲余興を著すに就て表紙ニ用ゆる為め柏木氏より古写経一巻を借り中央より数寸を切り取りて返却せり、然るに柏木氏もさる者、貸与する際経巻を目方ニかけ置きし故承知せす、遂ニ松浦より窃取りの分を取返へせり、これハ全く松浦の曲事なりしなり、悪い事をしてゐるといへは柏木よりは松浦の方一倍悪ル者なるへし、

循誘によれば、柏木は「松浦多気四郎翁をさん〳〵ニ悪口し彼著撥雲余興なと徹頭徹尾罵倒し居た」という。その理由として、武四郎は柏木から『撥雲余興』の表紙図版として使用するために「古写経一巻」を借用した後、「中央より数寸を切り取りて返却」したが、柏木も「さる者」で、貸し出す際に重さを量っておいたので、最終的には「窃取りの分を取返へ」した、という出来事を挙げ、「これハ全く松浦の曲事なりしなり、悪い事をしてゐるといへは柏木よりは松浦の方一倍悪ル者なるへし」と述べている。その一方、循誘は、柏木について、「われ独知つたふりをする人にて何を持ち行くも中々感心せす、いつか一ツ鼻を折り呉れんと思ふハ誰れも考ふるニて」とも語っている。武四郎と柏木の強烈な個性がうかがえる、ある意味で微笑ましい逸話である。

武四郎と柏木は、埼玉県大里郡冑山村（現埼玉県熊谷市）の豪農根岸武香から埼玉県比企郡大谷村（現埼玉県東松山市）から出土した「土偶人」を競って入手したように、互いに強烈な対抗意識を抱いていた。とはいえ、先述した明治8年（1875）の尚古会の事例のように、明治10年（1877）頃までは頻繁に交友していたと考えられるが、互いの対抗意識と強烈な個性が災いしてか、次第に疎遠になってしまったようである。

④山中笑の評価

武四郎が晩年、毎年のように西日本への旅を繰り返す中で面識を得た静岡在住の人物に、キリスト教メソジスト派の牧師山中笑（1850～1928）がいた。山中は、武四郎と知り合って古物の魅力を説かれ、特に古銭に魅せられて、好古家への道を歩み始めたとされるが（山口1998年、197頁）、晩年、日本各地の民俗や古物などに関する随筆『共古日録』全50巻をまとめている。そして、その第6巻の中で、武四郎について、以下のように記している（早稲田大学図書館古典籍総合データベースより）。

明治十二年の五月、松浦武四郎翁、静岡へ来られ、柏原学而氏ニ泊さる、此時予松浦翁の談話をきゝ覚へ居たるを記るし置候ことゝす、
翁曰く、陶器曲玉ハ、上州・甲州の地方に限て出ると、先き尖りたる〔図有〕ものなり、
昔ハ仏師ハ奈良に限れり、他国にてハ仏像を彫刻する者無之故ニ、奈良仏師に命しで作りしなり、掛ケ仏ハ諸国にて鋳造又ハ打製して作れり、神社内陣の本地として掛ケたり、此掛仏、四国辺に無之、関東より北国へ掛ケ多し、一千年前後、五、六百年迄ニ盛ニなりしと、
行基焼ハ駿遠地方に多しと、
青琅玕出所ハ大和辺より日向に限る、此石の産地黒竜江辺なり、又俗にへそ玉と称する玉、赤班文瑪瑙ハイヂプト玉といふもの、外国渡来ものと、
平扁の鈴ハ元の頃のものと、
ホタリといふ土器ハ〔図有〕此口へ竹管をさして酒をつくものと、
臼石の出る地ハ別而伊勢セイケン町ヨーダ（不明ナリ）なりと、
考古家必読書ハ桂林漫録、尚古図録〈二迄〉、梅園奇賞、好古日録、好古小録、千歳のためし、涛閣帖等をみらるべしと、
近頃支那より渡る古銭ハ万暦年間偽造し埋め置しが出たの也と、

以上、松浦翁の話し、今考れバ誤謬説も、見聞の広からさるとの為ニ誤り居られしものもあれど、同翁の話しハかゝるこそゆへ、随分考古の為ニハ益あること多かりし也、

山中は、明治12年（1879）5月、静岡の医者柏原学而宅に武四郎が宿泊した際に聞いた話として、勾玉や行基焼、古銭、「考古家必読書」などの話題を挙げ、それに続けて、「以上、松浦翁の話し、今考れバ誤謬説も、見聞の広からさるとの為ニ誤り居られしものもあれど、同翁の話しハかゝるこそゆへ、随分考古の為ニハ益あること多かりし也」と記している。武四郎が語る個々の事柄には誤りもあったが、武四郎の持つ豊富な知識量に圧倒されたということであろう。

また、先述した林若樹は、明治45年（1912）6月5日に山中から聞いた話として、武四郎について、以下のように記している（前掲『若樹随筆』233～236頁）。

○六月五日山中笑翁来話
予（翁）の松浦多気志楼主人と相識りしは静岡在住之折なりき、同所在住の柏原学而翁ハ予より後ニ松浦翁と懇意になりしなり、〔中略〕
松浦翁ハ能く古物家気質ニあることく商売気ある人ニて、当時乞食松浦なと称せられて、あまりよくいはれさりき、其庭中ニハ大なる釜を据へ、其上に大なる石棒ののり居りし事を記臆せり、書物にハあまり趣味あらさりしと見へ、経巻類ハ沢山ありしかと、珍書なとハ見さりき、
神田孝平翁も同翁のチヨン髷を頂きて未南校の教官たりし際より面識ありき、〔中略〕
松浦翁ハ大抵毎年一回宛旅行を試ミられき、其費用ハ一回金三百円なりしと、此金は北海道ニ就ての功労ニよりての年金なるか、これを旅行費ニ宛てゝ旅費並ニ古物採集の費ニ宛てられしなりと、

山中によれば、「松浦翁ハ能く古物家気質ニあることく商売気ある人ニて。当時乞食松浦なと称せられて、あまりよく」言われなかったという。「乞食松浦」云々には、先述した畠山の批評と通じるものがある。また、武四郎の晩年の旅の資金について、「北海道ニ就ての功労ニよりての年金」を当て、「旅行費」や「古物採集の費」で、1回の旅で300円ほどを費やしていた、と語っている。ちなみに、この「年金」とは、明治3年（1870）3月に武四郎が開拓判官を辞した時に明治政府から贈られた「終身十五人扶持」のことと考えられる。

⑤竹内久一の評価

明治22年（1889）に東京美術学校が創立された際に彫刻科の教授を務めた竹内久一（1857～1916）は、「元禄会と明治骨董史」という随筆で、青年期から好古家としての道を歩み始めた契機について、以下のように記している（『書画骨董雑誌』第45号、12頁）。

最初は、単に諸所より珍本を発見して、それを所蔵するを誇りとする位の程度であつたが、後に考古抄録、考古実録等を手にする様になつては趣味も非常に向上した。松浦武四郎先生からは藤定幹の古図集を貸して貰ひ、それ等を耽読して益々高尚に進むばかり、この松浦先生は、今の北海道十一ヶ国に釧路、根室、等の名を命けた有名な古実に通じ博学の先生である。
其の頃、松浦先生の宅や、西久保の大応寺等に骨董を研究する、今の考古学会の様な、一寸まア、あゝした普通の骨董家より高尚な側の研究に努めてる人々の会があり、之れに出席したりして自分の研究に資して居た。其の人々には永井十足、柏木嘉一郎等云ふ人がある。
然し、当底充分に私の趣味に合はなかつた、つまり通俗的で無かつた。学術的の方が多きを占め、愛翫と云ふ事が第二となつて居たのが此の会の大体であつたのである。

竹内が武四郎といつどこで面識を得たのかは不詳であるが、武四郎からさまざまな教示を受けていたことがわかる。ただ、武四郎が主催していた「今の考古学会の様」な会に出席して「自分の研究に資して居た」ものの、「通俗的」ではなく、「学術的の方が多きを占め、愛翫と云ふ事が第二となつて居たのが此の会の大体」であったので、「当底充分に私の趣味に合はなかつた」とも記している。ここからは、古物を単に愛玩するだけではない、学究肌な武四郎の一面もうかがうことが出来る。

以上、好古家としての武四郎に対するさまざまな人物評を紹介してきた。

おそらく、武四郎は、畠山の批評からもうかがえるように、おしゃべりで自己主張の強い人物であった。それに加え、「乞食松浦」と称されるほどの強烈な蒐集癖もあった。個性派揃いであった当時の好古家群像の中で、一際、強烈な個性を放っていたのである。それ故に、同時代の武四郎評には芳しくない見方が多い。ただ、強烈な蒐集癖はたぐいまれなる行動力や好奇心と、自己主張の強さは自身が集めた知識や情報を積極的に伝えたいという情熱と、表裏一体であったと考えられる。『撥雲余興』といった蒐集品図録の出版や、竹内が記した「骨董を研究する、今の考古学会の様な、一寸まア、あゝした普通の骨董家より高尚な側の研究に努めてる人々の会」の開催は、その情熱が結実した、一つの姿であった。そして、山中が武四郎の影響で好古家への道を歩み始めたように、そのような武四郎の活動は、武四郎と同世代の、また、武四郎よりも下の世代の好古家たちに大きな影響を与えたのである。

ところで、武四郎は、強烈な個性にも関わらず、生涯にわたって、幅広い交友関係を築いた。強烈な個性はさておいてその能力や活動が評価されたのかもしれないし、“好かれる人にはとことん好かれる”的な不思議な人間的魅力を備えていたのかもしれない。武四郎の伝記的研究に取り組む上で、非常に興味深い点と言える。

おわりに

好古家として本格的な活動を始める以前、例えば、武四郎は、いわゆる“黒船来航”の際には、伊豆国下田（現静岡県下田市）などへ赴いて積極的に黒船情報を収集した。6回に及ぶ蝦夷地踏査の際には、その地理的状況やアイヌ民族の暮らしぶり、アイヌ語の地名などを克明に記録した。政治的にも社会的にも激動していた幕末期の江戸市中にあっては、幕府・諸藩の役人や浪士、庶民などの動向に関する情報を積極的に収集した。そして、自身の見聞を通じて集めた知識や情報を、報告書や出版物、書簡などの形で、広く社会に伝えようとした。好古家としての活動にも、まさにこの“収集”と“発信”が当てはまる。

平成30年（2018）6月から平成31年（2019）2月にかけて、北海道博物館、三重県総合博物館、北海道立帯広美術館において、巡回展「幕末維新を生きた旅の巨人　松浦武四郎―見る、集める、伝える―」が開催された。筆者は深くその企画に関わったが、サブタイトルに示した3つのキーワードの通り、武四郎の生涯は、さまざまな分野において、「見る」「集める」「伝える」を極めようとした歩みであったと言える。「見る」は、旅などを通じて直接に見聞きしたこと、「集める」は、自身の見聞を記録に残したことや、知識や情報、モノを収集（蒐集）したこと、「伝える」は、収集した知識や情報、それに基づいて組み立てた自身の意見を、書物や書簡、会話などを通じて発信したこと、を指す。さらに、この巡回展では、武四郎という人物を理解してもらうために、上記の3つのキーワードに加え、「行動力」「情熱」「探究心」「好奇心」「自己主張と強烈な個性」「毀誉褒貶」「幅広い交友関係」「幕末維新という時代」という、8つのサブキーワードも設定した。武四郎は、150cmに満たない身長の持ち主であったが、小さな体に熱く激しい感情を抱え、周囲の人びとや社会にさまざまなインパクトを与えながら、幕末維新期という激動の時代を生きたのである。

引用・参考文献

・市島春城『余生児戯』（冨山房、1939 年［『市島春城随筆集』第 10 巻（クレス出版、1996 年）所収］）
・竹内久一「元禄会と明治骨董史」（『書画骨董雑誌』第 45 号、1912 年）
・日本書誌学大系 29『若樹随筆』（青裳堂書店、1983 年）
・ヘンリー・スミス『泰山荘　松浦武四郎の一畳敷の世界』（国際基督教大学湯浅八郎記念館、1993 年）
・山口昌男『知の自由人たち』（NHK ライブラリー 95、日本放送出版協会、1998 年）
・三雲町史編集委員会編『三雲町史』第 3 巻資料編 2（三雲町、2000 年）
・山口昌男『内田魯庵山脈 〈失われた日本人〉発掘』（晶文社、2001 年）
・鈴木廣之『好古家たちの 19 世紀　幕末明治における《物》のアルケオロジー』（吉川弘文館、2003 年）
・笹木義友・三浦泰之編『松浦武四郎研究序説　―幕末維新期における知識人ネットワークの諸相―』（北海道出版企画センター制作、2011 年）
・三浦泰之「〈古物〉収集家としての松浦武四郎に対する同時代評についての一史料」（『松浦武四郎研究会会誌』第 61 号、2011 年）
・芳賀明子「〈史料紹介〉「好古家」の書簡集『内山手簡』　―内山作信と小室元長との交流」（『文書館紀要』第 25 号、埼玉県立文書館、2012 年）
・三浦泰之・山本命「筑前国の「好古家」江藤正澄と松浦武四郎　―江藤正澄『遺憾録』を中心に―」（『北海道開拓記念館研究紀要』第 40 号、2012 年）
・三浦泰之「松浦武四郎記念館所蔵「絵葉書帖（木片勧進関係絵葉書帖）」について」（1）～（4）（終）（『松浦武四郎研究会会誌』第 64 号～第 67 号、2012 年～ 2014 年）
・内川隆志編『静嘉堂文庫蔵　松浦武四郎蒐集古物目録』（内川隆志、2013 年）
・公益財団法人静嘉堂『静嘉堂蔵　松浦武四郎コレクション』（公益財団法人静嘉堂、2013 年）
・北海道博物館ほか編『幕末維新を生きた旅の巨人　松浦武四郎―見る、集める、伝える―』（勝毎光風社、2018 年）

古銭蒐集家としての松浦武四郎

山本　命

1. はじめに

松浦武四郎（1818～1888）は古銭蒐集家としても活躍した人物であった。

その性格は、幕末に6回も行った蝦夷地（北海道）の調査における人並み外れた行動力や、膨大な情報をまとめあげた150冊を超える調査記録などから、一度決めたことは何が何でも最後までやり通すという強い意志を持つタイプの人であったことがうかがえる。それ故に、行き過ぎた蒐集活動によって同好の士から悪評が立つこともあったが、ただモノを集めるだけでなく、それらを調べ、整理して記録に残すということを熱心に行っていた。

例えば、蒐集品の中でも選りすぐった古物を河鍋暁斎や渡辺小華などの絵師に依頼して模写してもらい、図録として明治10年（1877）に出版した『撥雲余興』や、明治15年（1882）に出版した『撥雲余興 二集』はその代表的なものであるが、自身が蒐集した古銭の表裏両面を拓本に採り、一点ずつ貼り付けてまとめた「多気志楼蔵泉譜」(注1)と題された資料も残されており、武四郎が几帳面で真面目な人物であった姿を感じ取ることができる。

本稿では、武四郎の古銭蒐集がどのようなものであったかを紹介したい。

2. 古銭を集める

武四郎と古銭との関わりは、数え年の15歳までさかのぼる。

13歳から津藩の儒学者である平松楽斎のもとで勉学に励んでいた武四郎は、天保3年（1832）8月25日、伊勢国飯野郡射和村（現在の三重県松阪市射和町）にあった延命寺で、本草学者山本亡羊の門人であった西村広休と蔵書家の竹川竹斎が開いた読書室物産会に師の楽斎とともに参加している。当時の出品目録(注2)によると、楽斎が「石蚌」、「牡蠣」、「鉄螺」といった貝の化石と思われるものを出品するとともに、武四郎はどこから手に入れたのか「紅毛銭」二点を出品しており、すでに15歳の頃から古物や銭貨に関心を持っていたことがわかる。

武四郎の古銭蒐集が本格化するのは、六度に及ぶ蝦夷地の探査を終えた安政5年（1858）以降のことだと思われる。内容から慶応三年（1867）に出されたと考えられる実家宛ての手紙(注3)には、「古金者好ニ而相集メ、大国様之頃ゟ之正用品不残相あつめ、大判者一枚も持不申候得共、小判ゟ玩賞品ニ到るまて所持仕候」とあり、古代から流通していた貨幣は残らず集め、大判は一枚も持っていないが小判から縁起物の貨幣までを集めていたことがわかる。また、「古金家番附ニも随分宜敷処へ出候間、京大坂ゟ尋来ル者我か宅ニ参り、古金持之番附ニ乗候間相応なる身分と思ひ、大違ニ而いつも捧

写真1　多気志楼蔵泉譜（松浦武四郎記念館所蔵）

腹致し候事ニ御座候」とも記されており、古銭蒐集家の番付表に名前が載るまでになっていたことや、それを見た京都や大阪の人々がどれほどの金満家かと思い武四郎の家を訪ねてくると、まったく金持ちとは無縁の生活をしており、そのギャップに驚いている様子を見て、武四郎は腹を抱えて笑っていたという。人が思いもよらぬことを次々にやり、驚く姿を見て喜ぶのも武四郎の性格だろう。

慶応元年に発行された古銭蒐集家の番付表[注4]には、「下谷 多氣志樓」[注5]の名が東の三段目に上がっており、それは東の前頭29枚目という位置であった。これに関連するものとして、武四郎の実家に伝わる書簡（年月日・宛名不明の断簡）[注6]には、「僕此頃古銭も愛て候 七、八年前は日本の番付の三段目ニ居候得共、此頃者二段位ニ成候」と記され、三段目から二段目にランクが上がっていることがわかる。また、この書簡にはまだ手に入れていない古銭が列記されており、「右之類、市場の庄道十ニ無之哉、もし有之候ハヽ、求め遣スへし、あまり高けはすり形を直段共可被遣、此段急々道十せんさく願候」と記し、実家近くにあった道具屋の十蔵（略して道十）が持っていないかを調べ、あれば購入して送るよう求めている。こうした内容から、書簡は実家を継いだ甥の松浦圭介に宛てたものと考えられる。ちなみに、「道十」の子孫の方にお聞きしたところ、十蔵は当時のこのあたりでは有名な古銭蒐集家であったという。

この他に、武四郎は西洋のコインも数多く集めていたことが、元治二年(1865)に作成された「外国貨幣誌」[注7]という冊子からわかっている。その冒頭の「首言」には、「今茲ニ俄羅斯及ヒ和蘭、米利堅、英吉、佛蘭、索漏生、葡萄牙等当時通用ノ貨幣ノ摺□ヲ挙テ其量目ト其地金代料積ヲ附置モノハ、近年各国通商交易倍盛ニナリタリトイエドモ、其事件ニ関係ノ商估モ未其貨幣相応之事審□セサル者有テ其損失少カラス（中略）貨幣ヲ審ニシテ通商交易セハ何ソ其利セサルコトアランヤ、依テ今是ヲ一小冊トシテ同好之士ニ贈ルモノナリ云々」とあり、開国後に海外との貿易が盛んとなる中で、貿易相手国の通貨を知り、それが各国間でどのように取り引きされているかを知らなければ、日本が損をする恐れがあることから、このような冊子を作ったことが記されている。エジプトやウルグアイの通貨も載せられているほか、巻末にはアメリカやイギリスなど各国の通貨の種類とその交換表が添えられている。こうした冊子は手書きのものが松浦武四郎記念館以外に、津の豪商であった川喜田石水の資料を収蔵する石水博物館（三重県津市）などで見つかっており、「首言」のとおり、武四郎が懇意にしていた商人にだけ配ったものと考えられる。

写真2　慶応元年の古銭蒐集家番付表（平野英夫氏所蔵）※部分

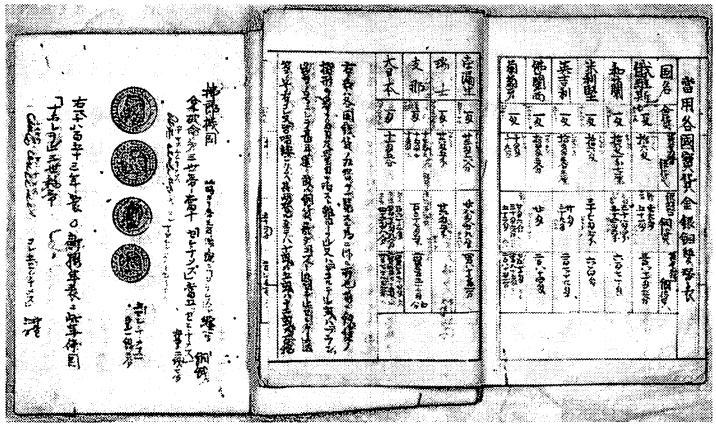


写真3　外国貨幣誌（松浦武四郎記念館所蔵）

4. 集めた古銭を寄贈する

こうして古今東西の古銭を蒐集した武四郎であったが、明治10年（1877）3月21日に集めた古銭のほとんどを大蔵省へ献上している。その様子については、武四郎が養子に迎えた松浦亀治郎（実家を継いだ圭介の子ども）が、圭介とその妻、つまり実の両親に宛てた手紙[注8]に詳しく記されている。そこには、「私父（※武四郎のこと）のあつめ候古銭、不残廿一日大蔵省へ長持三棹にて納め申し候。岩倉様大隈様も御出かけに相成、大にきあい仕候。すくに此事新聞に出候間、則新聞一枚差上申候」と伝え、岩倉具視や大隈重信も武四郎が納めた古銭を見に来るなど、大変な賑わいであったことがわかる。そして、3月24日付の朝野新聞[注9]には、「神田五軒町の松浦多気四郎君ハ我朝顕宗天皇の銅銭、和同万年を始め斉桓公の大公貨、秦始皇の大平両、漢文帝の半両、武帝の五銖、王莽の貨布等和漢種々の古銭を集め長持三棹に入れたるを去る廿一日大蔵省へ献納されたり」という記事が掲載されている。

それにしても長持三棹分の古銭とはすごい数である。これにより武四郎の名は古銭蒐集家の間では別格の扱いとなったことが、明治11年に出版された番付表[注10]によってわかる。そこには枠の外に「東京神田五軒町 多氣志樓」[注11]と表されており、明治13年、明治16年に出版された番付表においても確認することができる。

また、近年、武四郎の故郷である三重県松阪市において豪商「長谷川家」の資料が調査され、その中に武四郎自筆の掛軸[注12]が見つかった。古銭の拓本を2つ並べたものをいくつも貼り付けてヒラヒラと舞う蝶に見立てており、和歌が添えられている。そこには、「年ころあつめ置たりし古銭を宮内省に納めし時　そら高く のほれる蝶の 二ツ三ツ　たはふれ草に 猶残りけり」とあり、大蔵省だけでなく宮内省へも古銭を奉納したことが記されている。

この掛軸の古銭の拓本には「椀斎」や「□□堂」（判読不明）という小印が押されており、もとの所蔵者を示すものと考えられる。すなわち「椀斎」とは、江戸時代後期の考証学者として知られ、古銭の研究を行った狩谷椀斎（1775～1835）であり、椀斎が蒐集した古銭を武四郎が引き継いだ可能性がある。武四郎が所蔵する貨幣を記録した「蔵泉目録」[注13]へも、これと同じ「椀斎」の小印が各所に押されており、それを裏付けるものと思われる。

5. おわりに

武四郎が生誕200年を迎えた2018年、松浦武四郎記念館では武四郎の直系のご子孫宅に伝来した金銀貨幣の寄託を受け、調査を進めてきた。そこには享保大判などの大判や、慶長小判などの小判が多く含まれており、「多気志楼蔵泉譜」と照らし合わせると入手の時期や経路、購入金額を確認することができる。たとえば、享保大判については「明治元 辰九月、成島氏持来ル、七十二両ニテ求之」とあり、明治元年（1868）の9月に幕臣で後に朝野新聞の社長を務めた成島柳北（1837～1884）が持参して72両もの大金で

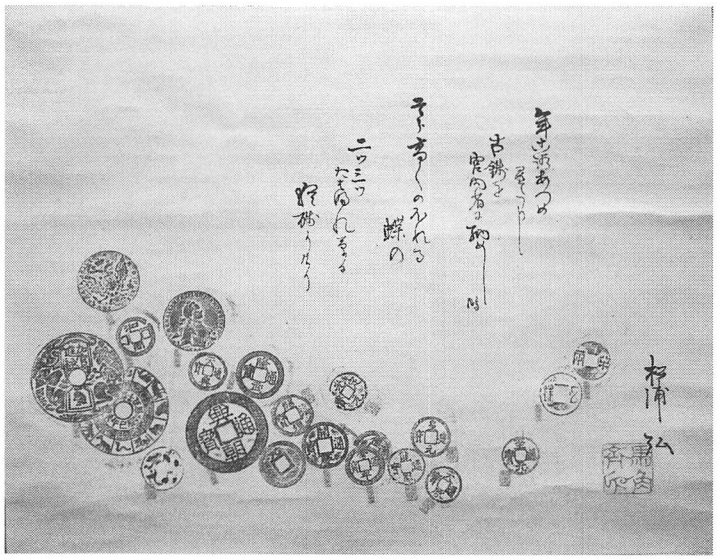


写真4 「古銭揃本賛歌」（松阪市所蔵）

買ったことが記されている。武四郎が古銭の蒐集に莫大な費用をかけていたことがわかるが、いったいその資金源が何であったかはまだ明らかではない。

松浦武四郎記念館では、今後の研究の課題として、武四郎の子孫に伝来した金銀貨幣の調査と「多気志楼蔵泉譜」や「蔵泉目録」との照合を進めるとともに、武四郎が大蔵省と宮内省に寄贈した古銭についてその所在の確認を進めていきたい(注14)。

写真5　武四郎収集の金銀貨幣（松浦武四郎記念館寄託）

注

（注1）松浦武四郎記念館所蔵資料で、一巻から十五巻までの15冊と、これとは別に三巻、四巻、六巻、七巻、八巻の5冊の計20冊が残されている。いずれも武四郎の自筆で、巻数が同じものでも内容は異なっている。第三巻の福田敬業の題字に「明治五年壬申」、第十一巻の富岡鉄斎の題字に「明治七年甲戌六月」とあることから、明治5年から7年にかけて作成されたと考えられる。

（注2）出品目録の内容は上野利三著『幕末維新期伊勢商人の文化史的研究』（多賀出版、2001）に収録されている西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵資料の翻刻文に拠った。

（注3）松浦武四郎記念館所蔵資料。九月五日付で、宛名は「松浦桂介」、差出は「松浦竹四郎」となっている。ちなみに、「竹四郎」は幼名で通称。のちに「武四郎」を使う。

（注4）平野英夫氏から資料をご提供いただいたもので、中央に「愛古泉」の題があり、東西に分かれて5段に古銭蒐集家の泉号が並ぶ。左の枠外には「慶応元乙丑年八月改正　江戸浅草雷神門内　神蝶堂中村善兵衛撰」とある。

（注5）当時の武四郎は、江戸下谷の仲御徒町通り三枚橋の北にあった三橋国之助の地所にある長屋に暮らしていた。武四郎の住居については秋葉實編『松浦武四郎選集 別巻』(北海道出版企画センター、2008)に所収の「松浦武四郎住居の移り変わり」を参照。

（注6）松浦武四郎記念館所蔵資料。

（注7）松浦武四郎記念館所蔵資料。武四郎自筆で2冊があり、巻末には「元治二年乙丑四月於武江下谷三橋之寓舎　多気志楼主人 松浦 弘 誌」とある。ちなみに「弘」は武四郎の成人後の諱（いみな）。

（注8）松浦武四郎記念館所蔵資料。3月27日付で、宛名は「松浦圭介、いわ」の連名、差出は「松浦亀」となっている。

（注9）北海道博物館の三浦泰之氏よりご教示をいただいた。

（注10）国立国会図書館デジタルコレクションのホームページにて、「愛泉家一覧」というタイトルで、明治13年、16年の番付表とともに画像が公開されている。

（注11）当時武四郎が暮らしていたのは東京の神田五軒町（現在の東京都千代田区外神田六丁目）で、千代田区練成公園内には松浦武四郎住居跡の看板が立てられている。

（注12）「古銭揃本賛歌」1幅として、『三重県　松阪市 長谷川家資料調査報告書（書籍II・生活道具)』（松阪市教育委員会、2018）の155頁に掲載。

（注13）松浦武四郎記念館所蔵資料。武四郎の自筆で3巻あり。

（注14）大蔵省へ寄贈された古銭については、日本銀行の貨幣博物館にあるのではないかと推測し、長年にわたり貨幣博物館に勤められ、現在は慶應義塾大学の非常勤講師をされている藤井典子氏にお聞きしたところ、

貨幣博物館にはないことをご教示いただいた。次に考えられるのが大阪の造幣局になるが、これについてはまだ確認できていない。ちなみに造幣局と武四郎は、養子「一雄」を通じたつながりがある。武四郎は水戸藩士加藤木賞三の子「一雄」を養子に迎え、一雄は彫金家として著名な加納夏雄に弟子入りして、夏雄とともに造幣局に勤めていた時期があり、武四郎は晩年の旅で大阪へ立ち寄り造幣局の官舎で暮らす一雄のもとを訪ねている。また、宮内省へ寄贈された古銭については、以前に東京国立博物館に長くお勤めだった佐々木利和氏から、東京国立博物館に武四郎が蒐集した古銭が存在することをご教示いただいたが、まだ確認できていない。

謝辞

本稿の作成にあたり、以下の方々にご教示とご協力をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

平野英夫氏（其角堂）、三浦泰之氏（北海道博物館）、佐々木利和氏（北海道大学）、藤井典子氏（慶應義塾大学）、国立国会図書館

静嘉堂文庫所蔵　松浦武四郎旧蔵の鍬形石について

徳田　誠志

1　はじめに

2018（平成30）年は、松浦武四郎の生誕200年の節目の年として、そして彼が名付けた「北海道」命名150年の年として、ゆかりのある地での展覧会・講演会等様々な顕彰活動が開催された(註1)。いずれの会場も多くの人で賑わっており、彼の人気の高さを物語っている。さらには松浦に関するいろいろな書物も刊行され、難しいイメージのあった松浦像を脱し、その人柄にも多くの人が魅了された（河治2018）。

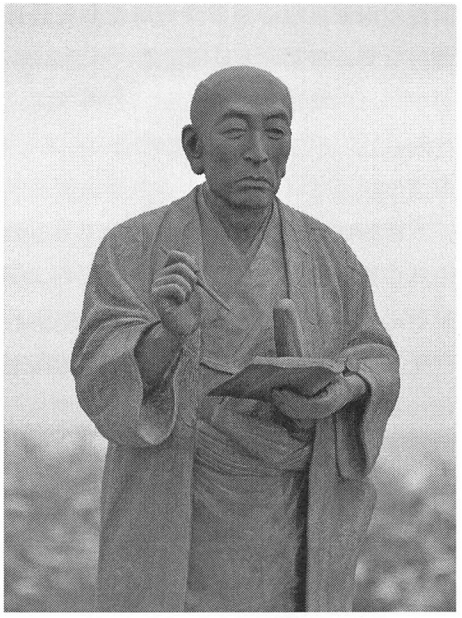


写真1　松浦武四郎銅像
（にしん文化歴史公園内）

しかしながら松浦を語るとき、彼の「何」に注目するかによって、様々な人物像が描かれる。最も有名な松浦像は、蝦夷地の「探検家」としての姿であり、北海道各地に彼の顕彰碑や銅像が建てられている（写真1）。

その一方、彼の残した唯一のポートレートは、「大首飾り」を身にまとった姿であり、晩年の「好古家」としての姿をこの世に留めている。さらには蝦夷地探検を終えてから、その知識に基づき幕末から明治維新の社会変動期に多くの人々と交流し、ある種「維新の志士」としての姿も松浦を語るときに外せない一側面である。

このように多方面に足跡を残した松浦であるが、小稿では彼が所蔵した1つの考古資料に焦点を当てて、彼の好古家としての姿を描き、彼が何を考えて考古資料の蒐集に情熱を注ぐこととなったのかについて言及していきたい。さらには、わが国に「考古学」という学問が芽生えかけている時期における状況を、松浦とその周辺にいた人々の交流から明らかにしていこう。

2　「好古」へのまなざし　－「古鈴図」の書写と「物産会」への出品－

本項では、松浦武四郎の古物蒐集癖の萌芽として、彼の残した『古鈴図』の写しと、同時期に参加した「物産会」について見ていきたい。

武四郎は、文化15（1818）年2月に、伊勢国一志郡須川村（現在の三重県松阪市小野江）において紀州藩郷士松浦桂介時春の3男として誕生し、名は弘、幼名を竹四郎と名付けられた。彼の生家が現存しており、現在は松阪市の史跡として整備され、公開されている。この生家の庭には武四郎が明治政府に出仕し、従五位に叙せられたことを記念して建てられた石灯籠が残されており、その表面には「従五位守開拓判官阿部朝臣弘建之」と刻んである。この生家が「伊勢街道」に面していたことから、伊勢神宮に参拝する多くの人々が行き交っていた。この人々がもたらす物産や情報により、武四郎は幼少期より「遠い世界」へのあこがれを抱いたとされ、旅に始まり旅に終わる彼の生涯に大いに影響を与えたとされる。

武四郎が13歳になると、津藩の儒者であった平松楽斎の私塾で学ぶ。武四郎はこの楽斎を生涯の師とするとともに、この私塾において後述する川喜田石水に出会ったとされる。そして『古鈴図』には、武四郎が私塾で学んでいた天保3（1832）年に、自ら写し取ったことが文末に記してある。その内容は、次の通りである

「右古鈴一巻　本居宣長宅遊　駅路七写鈴看　四五百森東　六有斎主人ヨリ備（借）之写　　天保三年六月中旬写　附録二鈴　松浦弘　写」

この一文により、本居宣長が蒐集した「鈴」を描いた図を、「四五百森」の東に位置する場所に居住した「六有斎」から借りて写したことがわかる。「四五百森」は、「よいほのもり」であり、松阪城のことを指し、「六有斎」は丹波屋と号した松阪の豪商（木綿問屋）の8代目長谷川元貞（1796～1858）のことである。現在、旧長谷川家は国の重要文化財として登録され、公開もされている。長谷川家8代目の元貞は単なる商人ではなく、商家の大旦那にふさわし知識と教養を備えた文化人として知られている。

すでに指摘されているが、この『古鈴図』にはすでに、後年の「記録魔」としての武四郎の片鱗を見て取ることができる。さらには「モノ」を集めるという「蒐集癖」の萌芽も読み取ることができよう（内川2014）。

この時期における武四郎のもう一つのエピソードとして、物産会へ彼が所有する「紅毛銭　二種」を出品したこともよく知られている。この物産会は『古鈴図』を書写したと同じ天保三年に、現在の松阪市射和町にある延命寺で開催されたものである。その主催者は、竹川竹斎と西村廣休である。竹川は文化6（1809）年に飯野郡射和に生まれ、生家は両替商を営む商家である。彼も長谷川元貞同様に単なる商人ではなく、幕末には『海防護国論』と題した意見書を幕府に提出し、勝海舟や小栗上野介忠順とも交流を持ち、むしろ「経世家」として著名な人物である。すなわち地元にあっては殖産興業に奔走し、さらには「射和文庫」を創設して文化振興も図っている。武四郎より10歳ほど年長であり、この頃から武四郎とは生涯を通じて兄貴分として交流を持った人物である。

もう一人の西村廣休は文化13（1816）年に竹川と同じく射和に生まれており、武四郎とほぼ同時代を生きている（没年は、明治22（1889）年）。生家も竹川と同じく両替商を営む大和屋であり、彼はこの豪商の11代目であるが、山本亡羊に学んだ本草家としての方が著名である。彼の旧宅跡には一本の「フウ樹」が残されており、三重県の指定天然記念物となっている。彼の邸宅内には、二千種近い植物が栽培されていたと伝えられる。現在残されている「フウ樹」も、江戸時代には樹液を薬用にしたとされ、本草学への貢献と研究のための植物園を自ら運営したことも知られている（小玉2015）。この西村が武四郎より2歳年長の17歳にして、すでに物産会を主催していることからも分かるとおり、彼も単に商人ではないことを物語っている。

この物産会には師匠の平松楽斎も出品していることから、武四郎もその伝手で加わったと考えられるが、すでに古銭、それも西洋の貨幣を所有していたことに驚かされる。さらには、後年古銭の蒐集家として名を馳せる素地が認められるものであろう。しかしながら、その後まもなく、武四郎は諸国を旅する人生をスタートさせ、地元を離れることになる。さらに蝦夷地を探検し、その成果を著作としてまとめ、明治3（1870）年に開拓判官を辞するまで約40年の間、蒐集家としての活動は表だっては見えてこない。しかし彼の人生を考えていく上で、少年期から青年期の多感な時期に彼の近くにいた人々との交流は、その後の人格形成に大きく影響したものと考えられる。

そしてまた、武四郎の古物蒐集、あるいは古物蒐集を通して物産学に与えた影響もこの青年期に彼の周辺にいた人々が関与したことも間違いない。そしてその人々の多くが商人であったこと、しかも豪商と呼ばれる人たちであり、彼らはその富を「物産学」という、当時としては新進気鋭の学問に投じていることが、まさに伊勢商人としての堅実さを物語るとも言えよう。

そもそも18世紀後半に勃興した物産学は、『集古十種』を刊行した松平定信のような大大名もさることながら、大坂に居住した「浪華の町人学者」として最も著名な木村蒹葭堂など、市井の人々がその基礎を支えていたといっても過言ではない。すなわち松浦武四郎という稀代の蒐集家が松阪に誕生したことは、彼の周辺にいた「伊勢商人」の存在が大きかったのではないかと考えるものである。

3 『撥雲余興』と『日本大古石器考』に記載された鍬形石

(1)『撥雲余興』の記載

それでは、松浦武四郎が残した「古物」、そのものを観察していくこととしたい。取り上げる遺物は、今日の考古学では「鍬形石」と呼ばれている古墳時代の遺物である。

松浦の古物蒐集過程については、十分には分かっていない。しかしながら明治4（1871）に九段坂上にある招魂社（現在の靖国神社）で開催された物産会（＝辛未物産会）には「雷斧砥（石皿）」や「未成雷斧（磨製石斧斧未成品）」等を出品している。さらに、武四郎自身、明治元年から自宅で毎月21日に「尚古会」を開催していることを書き残している。さらには、古銭等の蒐集家として明治6年頃には「東京ニ而名を上け申候」とも自認していることからすると、明治の一ケタ代において、すでに多くの収集品が手元にあったと考えてよい。そして、この松浦による収集活動の集大成として刊行された図書が、『撥雲余興』全2巻であるといえよう。『撥雲余興』は、明治10（1877）年に第1（首）巻が刊行され、明治15（1882）年に第2巻が刊行されている。

写真2 『撥雲余興』「鍬石」

今回紹介する鍬形石は、この『撥雲余興』の第1巻に掲載されているものである（写真2）。図は柏木貨一郎（政矩）が描き、武四郎が解説文を加えている。その解説文は、次のとおりである。

「鍬石

長六寸九分　上幅二寸二分　下幅四寸三分穿ノ処厚八分ヨリ九分ヨ（余）

是は、伊勢の津なる岡氏伝右衛門、大和国三輪山にて堀得られしとてもたらして、此人うせて後、石水翁川喜田久太夫して乞得たるなり。雲根志にハ、狐の鍬石とあるは、其かたち鍬ニ似たる故に号られたるか。さるハはやり（う）難波なる蒹葭堂と近江なる石亭の蔵せられしとて、これと三枚をミたるのミにて、おほく世にもつたはらしとおもふをもて、かくはものするなり。また添て図したるはおなし所にて堀得しとて、其あたりなる人にて三輪玉といひつたふるとて、こも考証のはしにもとて、ならひ図するなり。

そのかミのことはしらねと、今の世に得かたき鍬の石とこそミれ」

まずはこの解説文によって、この鍬形石の来歴を見ていきたい。最初の所蔵者は「岡伝右衛門」と記されている「岡 安定（おか やすさだ）」である。岡は文化7（1810）年に、伊勢国津に生まれ、生家は魚問屋である。彼も商人ではあるが、西村廣休と同じく山本亡羊に本草学を学んでいる。彼も伊勢商人であり、且つ本草学者という両面を持ち合わせた人物である。弘化3(1846)年5月には、彼の自宅において「物産会」が開催されたことが知られている（小玉2004）。この岡は明治7(1874)年に逝去し、その後、石水翁こと「川喜田久太夫」に引き継がれる。

この石水翁（川喜田家代14代 久太夫政明）こそ、武四郎の竹馬の友ともいえる人物である。彼は文政5（1822）年に生まれており、武四郎より5歳年下になる。10代の時に平松楽斎の私塾で出会った後、武四郎が伊勢を離れている間も交信が途絶えることはなく、その交流は晩年まで続く(註2)。川喜田家の家業

写真3　川喜田石水蒐集品（奇石博物館）

は木綿問屋であり江戸大伝馬町に店を構えるなど、先に紹介した長谷川家と並ぶ大商家である。そして長谷川元貞と同様に商家の大旦那であると同時に、和歌、茶道も極めた文化人であり、本草学・物産学にも傾倒した。それゆえ同郷の岡安定が亡くなった後、彼が所蔵した「鍬形石」を石水が受け継ぐことは極めて穏当であったといえよう。もちろんこの鍬形石だけを所有していたわけではなく、石水の蒐集した資料の一部は現在、静岡県にある奇石博物館に収められている（写真3）

また、石水の孫が川喜田家第16代となる川喜田半泥子（久太夫政令）である。彼の名は陶芸家として著名であり、「東の魯山人、西の半泥子」と称されるほどである。更に銀行の頭取という実業家として、更には県会議員等政治家としての活躍もよく知られている。この半泥子の作品を多数所有する博物館は、彼の祖父の名に因み「石水博物館」と名付けられている。

このような来歴をたどったことが明らかであることから、鍬形石は明治10年に『撥雲余興』が刊行された時点での所蔵者は川喜田石水であったと思われる。しかし、石水はそれからほどなく明治12（1879）年に逝去する。その後、いつの時点で武四郎のもとに到来したかは明らかではないが、二人の長い交流からすれば、石水の死後まもなく武四郎の手元にもたらされたと考えて差し支えなかろう。すなわちこの鍬形石は、伊勢の商人であり本草学者としても著名な「岡安定」、そして「川喜田石水」の手を経て、松浦の所蔵に至ったという、伊勢の本草学、あるいは物産学の流れを最も端的に示す遺物であるといえよう。

次に出土地であるが、解説文には「大和国三輪山」とある。すなわち、現在の桜井市にある標高480mほどの三輪山であると記述されている。この三輪山は、山体そのものが大神神社のご神体であり、神奈備の山として古来より尊崇を受けている。さらには江戸時代より子持勾玉等が出土することでもよく知られていた場所である。それゆえ却って、この鍬形石が三輪山周辺から出土したか否かを疑う余地があると考えたい。

鍬形石はそのほとんどが古墳の副葬品として埋葬部である石室、あるいは粘土槨から出土する。確かに三輪山周辺には古墳時代前期前半に属する大形前方後円墳が点在し、その中には桜井（外山）茶臼山古墳のように、鍬形石が出土した古墳も存在する。しかしながら今回紹介している鍬形石は、後述するように鍬形石にあっては型式学的に新相を示すことから、仮に奈良県内で出土したとしても前期前半の前方後円墳が集中する桜井周辺ではなく、やや時代が下った盆地西部に位置する馬見古墳群などにおいて出土する傾向が高いと考える。この鍬形石の考古学的な考察は次項で述べるが、この型式に属する鍬形石は、前期後半の古墳から出土することが多い。よって古墳時代でも前期前半に築造された古墳が集中する「三輪山」付近から出土したという記述は、少し保留しておきたい。なぜなら、先にも述べたように三輪山周辺は子持勾玉を含めた「神代石」が多数出土する場所として、江戸時代より有名であり、それゆえ「ブランド名」として「三輪山」が使用されている可能性も考えておく必要があるからである。

次に鍬形石の説明であるが、木内石亭の著わした『雲根志』を引いて名称の由来をのべ、所蔵者としては石亭と、大坂に居住した木村蒹葭堂をあげる。その上で、知られている鍬形石が本個体を含めて3点であることを記す。これは明治10年代当時にあっては、正しい認識であろう。そもそも名称は「鍬石」であり、まだ今日使用している「鍬形石」にも定まっていない。それゆえ最後に添えられた和歌にあるように「得かたき鍬の石」というのは、まさにその意味の通りであったと思われる。

また、三輪玉2点が描かれているが、これも古墳時代の遺物ではあるが、鍬形石と共伴することはなく、三輪山付近から出土（これも事実か否かは不明であるが）したことから、付随して記述されたものであろう。

以上が、『撥雲余興』に掲載された鍬形石についての来歴と解説である。

(2)『日本大古石器考』の記載

続いてこの鍬形石が同時代の書物に掲載されているので、その内容を見ていきたい。その書物とは、神田孝平著『日本大古石器考』である。鍬形石の記述を見ていく前に、まず神田孝平の略歴を記述しておく。

神田は天保元（1830）年に、現在の岐阜県不破郡垂井町岩手において、この地を治めていた旗本竹中家の家臣神田孟明の子として生まれる。現在地元には、邸宅跡を示す看板と、没後百年を記念して建てられた顕彰碑が残されている。幼少期をこの地で過ごした後、17歳の時に地元を離れ京都において漢学を学び、その後江戸に下り漢学だけではなく、洋学（蘭学）を学ぶ。その結果、文久2（1862）年に江戸幕府の学問所「蕃書調所」において数学の教授として登用され、ようやく正規の職を得る。その後「蕃書調所」の頭取にまでなり、「蕃書調所」が明治政府に移管されるとそのまま明治政府に出仕した。明治4（1871）年には、兵庫県令を命ぜられ、地方行政を担うこととなる。兵庫県令を退いたのち中央政権に復帰し、明治10（1877）年には文部小輔として、大森貝塚出土品の天覧にも係わっている。その後、元老院議官、貴族院議員を歴任し、亡くなる前日に男爵位を叙爵され、明治31（1898）年7月5日に逝去する。

さて、神田と松浦の交流がいつ頃から始まったかについては定かではないが、明治から昭和にかけての図書蒐集家として著名な林若樹が、次のような記述を残している（林1983）。

「神田孝平翁も同翁のチョン髷を頂きて、未（だ）南校の教官たりし際より面識ありき」

この記述による限り、神田が「蕃書調所」に教授として出役していた文久2（1862）年から慶應4（1868）年に同頭取に昇進した頃には、すでに松浦を知っていたことになる。松浦が12、3歳ほど年長になるが、一時は明治政府に出仕したがほどなく退官する松浦と、これから明治政府の中心を担っていく神田がどのような会話を交わしたのであろうか。もちろん二人のつながりは仕事上のつきあ

写真4　渋団扇（神田孝平）
（松浦武四郎記念館所蔵）

いではなく「古物」を媒介したものであると考えるのが自然であり、お互いの趣味の世界で意気投合したことが予想できる。二人の交流は、松浦が残した「渋団扇帳」に神田の「戯れ歌（いふもうし　いはぬもつらし　みだれ髪　かきやる心　しる人もかな）」（写真4）が残されていることからも、仕事抜きであったように思われる。ただこの「団扇」の和歌が、いつ記されたかについては記録がない。

さて、『日本大古石器考』は、明治17(1884)年に英文で『NOTES ON ANCIENT STONE INPLMENTS,&c.,OF JAPAN』として出版された（神田1884)。神田は、明治13年に文部小輔の職を離れ再び元老院議官を命じられた頃から時間的な余裕が生まれたものと思われ、主な活動は、明治12（1879）年に設立された「東京学士会院」副会長職や、明治17（1884）年に坪井正五郎等によって設立された「東京人類学会」の会長職（明治20年7月就任）となっていく。さらにはこの頃より『東京人類学雑誌』への投稿を亡くなる直前まで続けていくなど、「好古」の活動が活発となる。神田の「好古」への関心は幼少期にすでに芽生えていたとされるが（尾崎1998)、表立っての活動としては文部小輔を退官後、明治21（1888）年に病を得て身体が不自由になるまでの7～8年間が黄金期である。すなわち『日本大古石器考』は神田が最も熱心に「好古」に取り組んでいるときに、自らが蒐集した石器・石製品類を図化し、解説を加えた書物といえる。

刊行の目的としては「緒言」に書いてあるとおり、石器こそが最も古いわが国の歴史を考究していくための「古物」であり、更に諸外国にも似た形状を示す石器があることから、その比較研究の重要性を説く。さらには各資料の大きさが比較研究には欠かせないという認識から正確な縮尺の図を掲載することと、石材の鑑定を専門家に依頼し、その結果も記述している。このような考えから本書を刊行していることは、神田が単なる古物蒐集家ではなく、その考え方の中に「考古学」という学問的な思考を認めることができよう。

さらには自らの蒐集品だけでは十分でない場合には、周辺の人々の所蔵品を併せて掲載している。その人物名を記しているが、その筆頭に「松浦氏」とあり、この人物こそが「松浦武四郎」であると考えている(註3)。その他名前が挙がっている人物としては「柏木氏＝柏木貨一郎」・「根岸氏＝根岸武香」・「横山氏＝横山由清」・「蜷川氏＝蜷川式胤」らの名前が挙がっている。さらには、明治天皇に献上され、宮内省が保管していた「御物石器」の図も掲載されていることから、この点は政府高官としての力が働いたものであろうか。神田が所蔵する以外の掲載品については、所蔵者の名字の一字が解説文のあとに記述してある。

それでは、神田による鍬形石の解説文を見ていきたい。

英文：「Thin throughout, but thicker at the upper than at the lower extremity. Slightly convex toward the less ornamented side. An eliptical hole near the middle. Both sides ornamented nearly alike, with the exception of a perpendicular groove on one of them and the omission of finer horizontal lines on the other. Chlorite - schist.（Ma.)」

日文：「石板ニシテ少シク反張シ上部ハ狭クシテ厚ク下部ハ寛クシテ薄シ。中央ヨリ少シ上ヲ心トシテ長圓形ノ孔アリ。孔ヨリ上ヲ頭部トス。三條ノ横紋ヲ浮彫シ面背ヲ繞リ宛モ桶箍の如シ。孔ノ下邊ノ右側ニモ亦三條の横紋アリ。其下ニ於テ一小部ヲ剜欽シ指掛ノ形ヲ為ス。左側ニ於テハ側面ニ段階アリテ此ヨリ下部頓ニ寛シ。背面ハ又頂上ヨリ孔ノ上邊ニ至ルノ間一溝紋ヲ縦劃シ面背ヲ繞レル三横紋ト正交ヲ為ス。孔ノ下邊左右ニ横紋アリ左ハ表面ノ右邊横紋ノ側面ヲ繞リ來レル者ナリ。右ハ細横文四條ニシテ宛モ側面ノ段階ニ合セリ。下部ノ兩角ハ畧ホ直角ヲ為セリ。質ハ緑泥石ナリ。（松)」

このうち日本文は神田孝平が記述したものであり、英訳したのは養子となっていた神田乃武によるものと考えられる。英文がどこまで日本語を正確に訳しているかについての判断を控えるが、日本文を読む限り鍬形石の形状を正確に伝えようとしていることに努めていることがわかる。

一方、出土地については触れていない。当然、『撥雲余興』は目にしているであろうし、直接武四郎に

出土地を確かめることも可能であったと思われるが「三輪山」から出土したことについては触れていない。「緒言」にもあるように、神田は資料の解釈において「出土地」の重要性は十分認識していたはずであるから、「三輪山出土」がそれなりに信憑性があるのであれば記述することが当然であろう。それゆえ、出土地を「三輪山」と記述していないことも含め、先述したように『撥雲余興』の記述には疑問符が残るとしておきたい。

このように『日本大古石器考』と『撥雲余興』の記述を比較すれば、前者がより正確な記述、そして図(縮尺も含めて)を掲載することに心を砕いていることが理解できる。さらに名称については「狐の鍬石」という石亭が命名して以来の名称を使用しているが、欄外の記述において、これらの石器に「雷」「狐」の名称を付しているのは、従来からの因襲によるものに過ぎないことを述べる。

しかし神田にとっても、この「鍬石」が何に用いるのかということについての成案は持ち合わせていなかったようであり、用途への言及はない。しかしながらむしろ憶測を記述することなく、正確な形状の記載と正確な図を示すという態度に学術的な側面を見いだすことから、近代「考古学」の萌芽を認めておきたい。

4　鍬形石の今日的考察

(1) 考古学的観察

本項では東京の静嘉堂文庫に所蔵されている鍬形石について、現在の考古学的な観察をおこなっていきたい。

先ず、静嘉堂文庫に所蔵されている現状から見ていく。鍬形石は「寵仙」と墨書された縦 40.0cm、横 20.6cm、幅（奥行）41.0cm の杉材を使用した箱に収められている。箱書きは「小野湖山」によって、明治壬午（1882）年になされたことが蓋の裏面に記述してある。この収納箱の中に、「馬角第八」と付箋が貼られたによる印籠造の小箱（桐材）に収められている。さらに、錦で作られた紐付きの袋に収められている。錦袋・小箱とも鍬形石の大きさにぴったり合せて作られていることから、この鍬形石のために誂えられたものであり、武四郎の生前からこの状態であったと考えられる（内川・宇野 2013）。

写真 5　鍬形石（静嘉堂文庫所蔵）

続いて鍬形石の本体を見ていく。全長は 20.9cm、板状部の最大幅 12.9cm、重さ 563g を測る（写真 5）。石材は、肉眼観察ではあるが、暗緑灰色を示す緑色凝灰岩である。全体にくすんだ色調を呈しており、出土後の風化によるものか否かは判断できないが、すくなくとも古相を示す鍬形石に使用される碧玉、あるいは硬質感のある石材ではないことは確かである。

次に各部の形状であるが、傘状部は三段に見える折面帯に加工し、頂・谷部に沈線を施している。上面の形状は、長楕円形を示す。内孔は左右ほぼ対称の卵形を示し、環状部には、内孔に沿う平坦面は作られていない。よってこの環状部の断面形は五角形でなく、丸みを帯びた四角形を呈することになる。突起部は上下に匙面取りを施し、裏面まで巡っている。本個体の特徴としては、この突起部の中央に細い沈線を巡らしていることであろう。さらに突起部は、下端の匙面取りと内孔の下端が一致する高さに取り付いて

いる。板状部は右辺も湾曲せずほぼ真っ直ぐに作られており、長方形を呈する。又、横から見たときにほとんど反りはない。裏面を観察すると、傘状部の中央には本来の貝輪にのこされていた水管孔が形骸化した縦の凹線が施されている。さらに環状部と板状部の境を示すように、細い3本の沈線が刻まれている。

その他、突起部の上面に水銀朱かベンガラかの判断はできないが、わずかに朱色の付着物が観察される。このことは本個体が古墳の内部施設から出土したことを物語るものであって、古墳時代の遺物であることを確認することができる。

以上が今回紹介している鍬形石の解説となるが、先ず確認したいことは、本個体が古墳時代に製作された資料として間違いないと判断したことである。出土地やその状況が明らかでない資料については、一応、実物（古墳時代資料）かどうかを見極めなければならない。それは江戸時代の「神代石」と称される資料の中には、この時代（18世紀後半代）神代石蒐集が盛んになる中で「にせもの」が作られ、売買されたことが知られているので、注意を払う必要があると考える（徳田1996）。実際に『日本大古石器考』に掲載された「鍬石」にも、「にせもの」と考えた方がよい資料が掲載されている。小稿ではこれらの江戸時代に製作された「にせもの」については詳述しないが、武四郎が蒐集した石器、石製品にも「にせもの」が含まれていることには注意しておく必要はある。これは武四郎蒐集資料の価値を減じるものでは全くないものであり、むしろ江戸時代における「好古」の実態を考察していく際には、極めて重要な資料であると認識すべきである。

(2) 型式学的考察と類似資料出土古墳について

さて、今回紹介している鍬形石については出土地は不明であるが古墳時代資料と考えられることから、本項では本資料の考古学的位置づけを考えていきたい。

まずは鍬形石における編年的な位置づけを試みる。鍬形石の型式学的な変化と編年観、さらにはそこから導かれる所属時期については、古くは小林行雄が先鞭をつけ、その後、渡辺貞幸が大枠を示した（渡辺1979）。現在では、北條芳隆が系統の設定と、それぞれの型式変化と編年観を提示している（北條1990）。これらの先行研究に従えば、鍬形石の型式学的変化は、祖形となった貝製腕輪の原形から離れていく方向への変化として捉えられる。そしてその変化を端的に言えば、「左右対称化」と「過飾化」であると考えている。すなわち左右対称化の動きにおける各部位の変化は、内孔が左右対称の卵形になり、板状部については右辺の湾曲がなくなり直線化することが指摘できる。この左右対称化が進むことは結果的に、傘状部の上辺と板状部の下辺が平行になる傾向を読み取ることができる。この左右対称化と連動し、突起部の取り付く位置が、内孔の中央付近から内孔の下端の位置まで下がってくることも指摘されている。

過飾化については、傘状部と突起部に顕著な変化を認めることができ、今回示した個体の傘状部のように、この部分を折面帯で飾ることが多い。すなわち、貝製腕輪からの直接的な変化では、あり得なかった文様が施されることになる。このような折面帯の文様は、同時期の車輪石や石釧の文様変化に対応したものであり、これらの3種類の腕輪形石製品が互いに影響しあって型式変化を遂げていることが分かる。突起部についても本来の貝製貝輪では見られない文様が付加されることが過飾化の指標であり、本個体のように中央に細い沈線を巡らすこともその1つである。

以上の型式学的な特徴から、改めて松浦武四郎が所蔵した鍬形石の編年的な位置づけを考えてみたい。先述したように鍬形石の型式学的変化から編年観を示した渡辺は、各部位の変化を総合して4段階の変化を設定している。結論的にいえば、今回紹介している鍬形石は、突起部の取り付く位置が内孔下端と一致する点などから判断すると、渡辺の設定した第3段階に相当すると考えている。製作に使用された石材を検討した北條も、本個体の緑色凝灰岩は新相を示す個体に使用されることを指摘している。

このように鍬形石は前期古墳の副葬品として用いられる遺物であるが、松浦武四郎旧蔵の鍬形石は、そ

の型式学的な位置づけから新相を示す個体であると判断できる。しかしながらその実年代を、この資料だけで導くことも難しい。鍬形石の型式変化に4段階を設定することが妥当であるとしても、各段階の時間幅は同一とは言えない。さらには、数型式に渡る資料が同一の内部施設から出土することも少なくなく、各個体が製作から埋納までの期間がまちまちであることを示している。

よって、小稿では今回紹介している鍬形石と傘状部、突起部などの特徴が一致する個体が出土した古墳を取り上げて、実年代観に迫ってみたい。本個体の諸特徴に類似する個体として、写真6に示した岐阜県可児市身隠山白山古墳出土資料を例示しておく（八賀1968・禰宜田2002)。この個体の特徴としては傘状部の折面帯、卵形を示す内孔の形、環状部に内孔平坦面が作られていない形状、突起部の位置とその中央に巡る沈線の状況など武四郎旧蔵資料と酷似する。

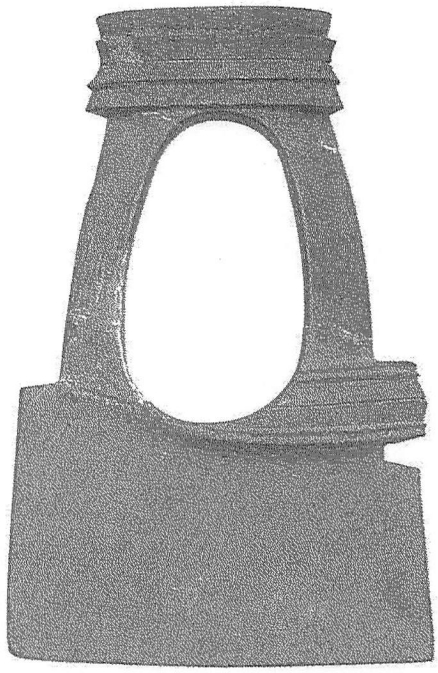


写真6　身隠山白山古墳出土鍬形石
（東京国立博物館所蔵）

この個体が出土した身隠山白山古墳は、可児市のほぼ中央に位置する標高130m程の丘陵上に身隠山御嶽古墳の2基が、裾を接するように築かれている。墳丘はどちらも円墳であり、大きさはともに直径40m程とされている。身隠山白山古墳からは、明治35（1902）年に墳丘上にあった白山神社の玉垣修理中に内部主体が発見され、鏡2面のほか、鍬形石、車輪石をはじめとす る石製品や巴形銅器片が出土した。内部主体については明確ではないが、竪穴式石室に使用したような石材が認められないことから木棺を粘土で包んだ粘土槨が想定されている（長瀬1996)。

さてこの身隠山白山古墳からは、4点の鍬形石が出土している。そのうちの2点は完全に左右対称形を示すものである。もはや突起部を認めることもできなくなり、いってみれば鍬形石の最終形態であって、渡辺の設定した型式でも最終の第4段階に区分されるものである。この第4段階に属する全く左右対称形の鍬形石は、出土数としては限られており、現在のところ岐阜県美濃地方と奈良県大和盆地においてしか出土を見ない。大和盆地の出土古墳としては、北葛城郡広陵町にある巣山古墳（但し出土については伝承であるが）と、磯城郡川西町所在の島の山古墳が代表例である。この両古墳から、傘状部に折面帯の文様が施され、突起部が内孔下端の位置にある第3段階の鍬形石が出土していることから、松浦武四郎旧蔵の鍬形石が出土した古墳を島の山古墳、巣山古墳に近い時期を想定することが可能であろう。よって、実年代観を現在の考古学的な考察で指摘するとすれば、4世紀後半でも末に近い頃といったところが最大公約数的な数字と考える。それゆえ、古墳時代前期前半期の古墳が集中する三輪山周辺から出土したことは疑わしく、仮に奈良県内の出土古墳を想定するとすれば、盆地西部に位置する馬見古墳群のような前期後半の古墳が集中する場所から出土したと考えることが妥当であろう。

以上が松浦武四郎旧蔵の鍬形石について、現在の考古学的な観察であり、鍬形石としては新相を示す個体であること、実年代観としては4世紀末頃に位置付けられることを指摘しておく。

5　まとめ　－松浦武四郎の考古観・明治10年代の考古学－

これまで「岡安定」「川喜田石水」「松浦武四郎」という伊勢にかかわる人々の手によって伝えられ、現在静嘉堂文庫に所蔵されている鍬形石についての観察と考察をおこなってきた。小稿をまとめるにあたっ

て、武四郎が『撥雲余興』を刊行した明治10年代における「考古学」を取巻く状況を見ておきたい。

明治10（1877）年における考古学界最大の出来事は、なんといってもE・S・モースによる大森貝塚の発掘調査であろう。この発掘こそが、近代考古学の幕開けと位置付けられることも多い。その是非はともかく、この発掘から2年後に刊行された大森貝塚の発掘報告書の中に「日本ほど考古学に関心を持つ人が多い国は世界中他にどこにもない」という記述がある。さらに報告書の序文において、関係者への謝辞を記した部分の筆頭に「KANDA（神田）」の名前が記されており、この「神田」が「孝平」であることは間違いない。すなわち「考古学に関心を持つ人」の代表が神田孝平であり、神田の周辺に居て『日本大古石器考』に所蔵者として名前が挙がる「蜷川式胤」・「松浦武四郎」らのグループをモースが意識していたことを知ることができる。

神田は文部小輔という立場から、大森貝塚出土品について明治天皇への天覧を上申し、実現する。大森貝塚の発掘は数回に分けて実施されたようであるが、明治10（1877）年の10月に実施された第4回の発掘調査から1ヶ月も経たない、同年12月14日に神田から太政大臣三条実美宛に「府下大森ニ於テ発見ノ古物供天覧度該品九函并目録筆記共二通呈進候条該品九函ハ経覧後回下相成候様致度此段上申候成」との上申書が提出され、この中に「筆記」とある『大森村古物発見ノ概記』が伴っている。そしてこの上申から一週間足らずの12月20日午前中に、天覧が実現する。

この「上申書」・『概記』とも文部大輔田中不二麿の名によって提出されているが、この時期田中は外遊に出ており、実質文部行政のトップとして指揮をしていたのが神田であって、天覧を計画したその実質的な責任者は神田であるといって間違いない。そして『概記』は「考古学ノ世ニ明ラカナラザルヤ久シ・・・(以下、省略)。」という書き出しで書き起こされており、わが国の公文書に「考古学」という言葉が用いられた初現といっても差し支えないであろう。このように初期の「考古学」を支えた人々は、モースが言う「世界で最も考古学に関心を持つ人々」であり、それまでの「好古」を担ってきた人々が「考古」への橋渡しを果たした瞬間とも言えよう。

また、民間人であった松浦もモースとの面会を果たしている。その日付は明治15（1882）年12月11日にモースが松浦邸を訪問している。モースが著わした『日本 の日その日』には、次のような記録がある（モース2013）

「かなり有名な古物蒐集家松浦竹（武）四郎を訪問したところが、非常に親切にむかえてくれた。」

そして松浦の『渋団扇帳』には、モースが得意な巻き貝の絵を描いた渋団扇が残されている。ふたりの会話は分からないが、モースにとっても松浦にとっても愉快な時間であったことが想像できる。

このように明治10年代の状況は、モースによる大森貝塚の発掘を契機として、近代学問としての「考古学」が産声を上げるとともに、モース自身が驚嘆したように松浦ら多くの「好古家」が江戸時代以来の古物蒐集やその展観活動としての古物会を開催している状況である。

改めて松浦による蒐集の目的を考えると、彼自身が『撥雲余興』の跋文で述べるように「いたづらに古物好ミすと言にあらず。(中略)残し置る物を始、宮寺等の什器なりしは其宮寺にて保護なるべき時至らば、おしまずとも宮寺に納めまいらすべし」と記す。すなわち自分自身は一時の保管者であり、本来あるべき所できちんと伝えられていくことの必要性を説く。すなわちこの時期、いわゆる「廃仏毀釈」というような風潮の中で、古物が失われていくことへのアンチテーゼが松浦の収集癖を駆り立てたのではなかろうか。さらには失われていく「江戸」への郷愁も感じられる。

その一方神田は、明治という新しい世において、モースの持ち込んだ「近代科学」としての「考古学」を実現していくことに腐心する。もちろん神田自身「考古学」を学んだわけではないが、正しく物の形を「実測図」によって表現する試みは、モースによる大森貝塚の報告書に影響を受けていると思われる。このように明治10年代の「好古」と「考古」は、江戸の残影をひきづりながら、その一方で近代的学問の確

立を模索する狭間の中で共生した状況が窺える。

今回紹介した鍬形石は、まさにこの時代の考古学を物語る証言者であろう。

註

（註 1） 2018 年に開催された展示会としては，次のようなものがある
北海道博物館「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎 －見る、集める、伝える－」
静嘉堂文庫美術館「生誕 200 年記念 幕末の北方探検家 松浦武四郎展」

（註 2） 松浦武四郎と川喜田石水の交流については，下記の展示会を参照した。
石水博物館「松浦武四郎と川喜田石水－幕末知識人のネットワーク－」平成 26 年

（註 3） 『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS,&C.,OF JAPAN』に（Ma）と記された人物について，斎藤忠は平戸藩藩主「松浦詮（1840 ～ 1908）」と推定しているが，今回紹介している鍬形石が「松浦武四郎」所蔵品であることから，（Ma）は松浦武四郎であるとすることが妥当であろう。
斎藤忠 1983「解説」『日本大古石器考』復刻日本考古学文献集成 第一書房

文献

E・S・モース 2013『日本その日その日』訳：石川 欣一講談社学術文庫 2178

内川隆志 2014「近代博物館における人文資料形成史一視点 静嘉堂所蔵松浦武四郎旧蔵資料の分析から」『博物館学雑誌』第 40 巻第 1 号（通巻 61 号）

内川隆志・宇野淳子 2013「明治前期における好古家の実相－松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人の周旋をめぐって－」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第 5 号

尾崎 護 1998『低き声にて語れ―元老院議官 神田孝平』 新潮社

河治和香 2018『がいなもん 松浦武四郎一代』小学館

神田孝平 1884『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS,&C.,OF JAPAN』 日本題『日本大古石器考』

小玉道明 2004「物産会・博覧会に出土品の展示を見る－三重の考古史序章」『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集 同刊行会 三星出版

小玉道明編 2015『伊勢商人西村広休の本草物産学』光出版印刷株式会社

徳田誠志 1996「腕輪形石製品のにせもの－その存在と博物館における保管・収集業務について－」『関西大学博物館紀要』第 2 号

長瀬治義 1996「「身隠山古墳群」覚書」『美濃の考古学』創刊号 同刊行会

禰宜田佳男・北條芳隆 2002『考古資料大観 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』第 9 巻 小学館

八賀 晋 1968「岐阜県可児郡広見町白山神社古墳出土遺物」『岐阜史学』第 55 号

林 若樹 1983『若樹随筆』日本書誌学大系 29 青裳堂書店

北條芳隆 1990「腕輪形石製品の成立」『待兼山論叢』史学編第 24 号

渡辺貞幸 1979「鍬形石の基礎的研究」『島根大学法文学部紀要・文学科編』第 2 号

松浦武四郎コレクションからみた「武四郎涅槃図」

長谷　洋一

はじめに

河鍋暁斎筆「北海道人樹下午睡図」（重要文化財・松浦武四郎記念館蔵）〔図版〕いわゆる「武四郎涅槃図」は、松浦武四郎コレクションの一端を知る資料としてよく知られている。

「武四郎涅槃図」は、画面中央に描いた寝台の上に、大首飾りをつけ、腰には巌谷一六揮毫の「火用心」と記した袋を下げて昼寝をする武四郎本人を涅槃に入る釈迦に見立てて描いている。武四郎の背後には螺鈿入の春日卓を並べて緋毛氈を敷き、その上に武四郎蒐集の彫刻類がところせましと並べられている。横臥する武四郎の周りには武四郎蒐集の絵画から抜き出した人物や動物を悲嘆にくれる姿に改変して描かれている。卓上の彫刻類や武四郎を取り囲む人物や動物のもとになった絵画は、現在も静嘉堂文庫や松浦武四郎記念館などに収蔵されており、武四郎晩年の古物蒐集を示す資料として展覧会にもたびたび出品されている。

「武四郎涅槃図」については、既に安村敏信氏によって涅槃図に描かれたモチーフと武四郎コレクション資料との同定が行われ、近世から続いた「見立て涅槃図」の一種であるとされている(1)。

しかし武四郎がなぜこうした「武四郎涅槃図」を制作したのかという制作意図については触れられていない。「武四郎涅槃図」には上述したように多数の武四郎コレクション資料が描かれており、武四郎コレクションの披露とも思われるが、後述するように「武四郎涅槃図」制作中の明治15年（1882）8月に武四郎は『撥雲余興』二集を刊行しており、刊行以降にそれほど蒐集品が増えたとは思われない。また「武四郎涅槃図」の箱蓋裏には武四郎の親友である小野湖山が「拈香三拝」して箱書をしたためており湖山の謹厳な態度がみてとれる。古希も過ぎた小野湖山が「おふざけ」で拈香三拝して「武四郎涅槃図」の箱書を記したとも考えがたく、「武四郎涅槃図」の制作意図は古物蒐集の披露とは別のところにあったのではないかと思われる。

そこで、「武四郎涅槃図」に描かれたコレクションの検討を通して「武四郎涅槃図」の制作意図について考えてみたい。

1.「武四郎涅槃図」に描かれた蒐集品

「武四郎涅槃図」は、左右84.2cm、天地152.6cmを計る絹本着色の一幅で、画面左下に「明治丙戌春日／暁斎洞郁図」の落款、「洞郁」の印章があり、幕末から明治にかけて活躍した絵師の河鍋暁斎によって描かれ明治19年（1886）春に完成したことがわかる。箱蓋表には「北海道人樹下午睡図／暁斎洞郁筆」、箱蓋裏には「陸放翁句云一身自是一唐虞禅家所／説即身即佛蓋亦此意嗚呼／北海道人樹下夢中之楽可想耳／湖山七十三叟小野愿拈香三拝題」と記されている。

「武四郎涅槃図」は2002年度に修復され、その際に旧軸木から「北海翁松下午睡／河鍋暁斎／明治四巳年稿之九年戌三月落成／晁平装之／于時七月五日／翁記之／松浦」の墨書銘が認められた。干支からみて、旧軸木の年号はひと桁目の「十」を省いているので、正確には明治14年（1881）に河鍋暁斎による草稿が始まり明治19年（1886）3月に完成し、その後7月5日に表装を終えており、「武四郎涅槃図」は草稿から完成まで約6年かけて制作されたことがわかる。

春日卓上の彫刻類は35点を数え、このうち19点は静嘉堂文庫に残るコレクション資料の墨書銘や納入箱の箱書、武四郎の著書である『尚古杜多』『撥雲余興』や『癸未溟志』『乙酉後記』などからコレクション資料の入手時期、経路がわかる。また松浦武四郎記念館蔵の絵画2幅も同じく武四郎の著書から入手時期が判明する。

そこで、まず卓上の彫像類17件及び絵画2幅について入手時期、経路について確認したい。

①〈鉄製御正体〉

納入箱蓋裏[2]に「上野国伊香保神鉢明治一年於神地／堀出之／火産鑑神／埴安姫神／延喜比之物敗／内舎人穂積之真年」と書かれた資料である。横山由清『尚古図録』第二編（明治9年8月刊）には「鐵版鑄像」の名称で同資料が掲載されており、「田中行氏蔵」品としていることから、武四郎が鉄製御正体を入手したのは明治9年（1876）8月以降のことと考えられる。

②〈図像瓦（瓦仏）〉

箱蓋裏には「河内国常楽寺瓦仏／依／皇極天皇御願而壇下之人／被奉埋納数万躯此其一／躯也／明治十二年八月／中井兼之拝題」の墨書がある。中井兼之（敬所）の箱書から明治12年（1879）8月までに武四郎の蒐集品となったことがわかる。

③〈鉄製懸仏〉・④〈猿田彦大明神像〉・⑤〈柿本人麿坐像〉

稿本『癸未溟志』[3]明治16年（1883）3月17日の記述に、来訪した武四郎のために静岡・柏原学而（孝章）が主催して開かれた古物会の記事がみえる。古物会には、焼津・松村宗吾が古銅薬師如来〈富士薬師岳本尊〉[4]、「頓阿上人作人丸像」を、清水・中泉昇平は「猿田彦宇須女命　鵜幸右衛門作」をそれぞれ出品している。

静嘉堂文庫には2躯の〈柿本人麿坐像〉が所蔵されており、それぞれ「彫十三號／木彫／人丸大明神／頓阿作」「彫十四號／木彫／人丸大明神／為家作」の付箋がある。松村宗吾出品の「頓阿上人作人丸像」は前者に該当する。なお松浦武四郎記念館蔵『蔵品目録』（作成時期、筆者とも不詳）には「人丸太明神／同人（頓阿）作」のみ記載がある。従ってこの3件は明治16年3月17日以降に武四郎が獲得したと考えられる。

⑥〈頼朝坊仏〉・⑦〈蛤蜊観音像〉・⑧〈白衣観音大士〉

〈頼朝坊仏〉箱蓋裏には「松浦氏蔵／万巻兼（印）」とあり、市河万庵による箱書である。稿本『癸未溟志』明治16年3月15日には、武四郎が吉原宿鈴木香峰宅に投宿した際、「老人頼朝仏一体を恵まる。」とあり、校本『癸未溟志』では、吉原・鈴木香峰蔵「頼朝坊仏」が「頼朝坊仏一躯／頼朝仏豆州大仁村蔵春院舊蔵」とみえ、蔵春院旧蔵頼朝坊仏は鈴木香峰を経て明治16年3月15日に武四郎が入手したことがわかる。

また『甲申日記』明治17年3月31日には「（蔵春院に）頼朝坊仏と云る千体仏有りしが、是を去春香峰老人より一体贈り貰ひしが、また万庵主人も一体を余に贈り呉しが故、其因縁を審にせまほしと」とみえる。『武四郎涅槃図』に描かれた頼朝坊仏が、市河万庵、鈴木香峰のいずれから贈られたのか判明できないが、頼朝坊仏の原資料は静嘉堂に2躯残っており、『蔵品目録』においても「頼朝坊仏　二体」と記されている。箱蓋裏の箱書からすれば、当該の頼朝坊仏を入手したのは、明治17年3月31日である。

〈蛤蜊観音像〉・〈白衣観音大士〉については、稿本『癸未溟志』「新獲目次」に「蛤蜊観音像　一禎／等観秋月之筆」「白衣観音大士　一禎／探幽斎八十九歳筆」と記されており、秋月等観「蛤蜊観音像」、狩野探幽「白衣観音大士」はともに原資料が松浦武四郎記念館に所蔵されている。『癸未溟志』「新獲目次」は明治15年に太宰府花園寺旧地から出土した「古銅小仏像」に始まる15件の蒐集品を列記しているが、そのなかには「筑陽筆」渡唐天神像、「筑前聖福寺仙厓和尚筆」渡唐天神像、「肥後国北岡山」出土碧琅玕勾玉など九州由来の蒐集品が散見できる。『癸未溟志』には、明治16年3月31日に武四郎が神戸港から出帆、翌日には馬関に上陸、門司に到着した後、福岡、熊本、宮崎、鹿児島をまわって5月2日に博多に戻る旅が記されている。「新獲目次」に記された資料もこの九州旅行で獲得したものと考えられる。

したがって⑥〈頼朝坊仏〉は明治17年3月31日、⑦〈蛤蜊観音像〉、⑧〈白衣観音大士〉は明治16年4月から5月までに入手したとみられる。

⑨〈宇須女像〉

箱蓋裏に「丁丑天長節／湖山愚題籤（印）（印）」とあり、明治10年（1877）11月3日に小野湖山が箱

書していることからこの頃までに武四郎が入手したと考えられる。

⑩〈とりもち仏〉

箱蓋裏に「周防国吉敷郡／小俣村廃西金／寺所安置也」とあり、吉敷郡小俣村（現防府市台道）からの出土品である。

周防・山口には歴史家の近藤清石がおり、『壬午遊記』[5]によれば明治15年5月2日に武四郎は近藤清石宅に宿泊している。当時、近藤は山口県地誌訂正取調掛兼務で、周防の地誌および旧記の編纂に尽力していた。静嘉堂文庫蔵松浦コレクションの「下駄仏」も近藤清石『山口縣風土誌』に「下駄仏」と記され、この折に近藤清石からの紹介であった。とりもち仏も明治15年5月2日以降に武四郎が入手したと思われる。

⑪〈如意輪観音像〉

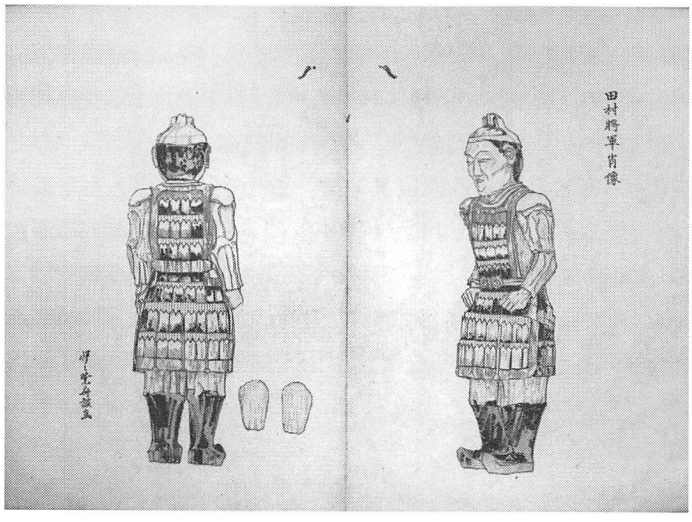
箱蓋表に「支郡北京万仏山／如意輪大土塑像」、同裏に「附属東京／松浦多気志郎弘老人／時明治十二年五月吉辰／可翁禅師同門／遠孫梧庵識／（印）」とある。『尚古杜多』第二冊（明治12年8月跋）[6]には「新獲」として「如意輪大土塑像、支那万寿山佛塔中ノ一／建仁寺中禅居庵梧庵附属」と記されている。『己卯記行』[7]明治12年（1879）5月19日には京都・木屋町生庄楼で開かれた古物会に梧庵（梧庵紹材）と武四郎が参加した記述があり、おそらく古物会に梧庵が如意輪大土塑像を出品した明治12年5月19日以降に武四郎が入手したものであるとみられる。

⑫〈武者像（根付）〉

箱蓋裏には小野湖山による「世事変遷人情日趨新耳／観一古物不能無感焉／明治戊寅冬日／湖山老人題（印）（印）」とあって明治11年（1878）冬以前に入手したものである。なお『蔵品目録』には「探僊周山作武者」とあって作者を吉村周山としている。

⑬〈シャブティ〉

箱蓋表に「埃及古神像」、蓋裏には、「明治十四年八月奉贈／北海松浦老詞宗／辱交適処山県篤蔵／（印）」とあり、明治14年（1881）8月に山県篤蔵から贈られたものである。付属の書簡によれば、浄土真宗本願寺派僧である島地黙雷が友人の山県篤蔵に「往年泰西ニ航シ埃及羅馬印度等ノ古都旧址ヲ捜り帰朝ノ日塑像一基ヲ以テ余ニ贈レリ」としたものである。島地黙雷のヨーロッパ旅行の行程は『航西日策』[8]に記されており、『航西日策』によれば、島地黙雷はヨーロッパ旅行の帰途、明治6年（1873）5月7日から同14日までエジプトに滞在している。シャブティはこの時に黙雷が入手したものとみられる。書簡では、山県篤蔵は贈られたシャブティを明治11年（1878）に開館した広島県の博物館に寄付したが、博物館が閉館したために山県の手に戻ってきており、明治14年8月下旬に松浦に譲ったとしている。



⑭〈田村将軍肖像〉

原資料（静嘉堂所蔵）の付箋に「彫十五號／木彫／田村将軍像／小儒巻物記別筥入」とあり、また『撥雲余興』第一集（明治10年8月）に付属の巻物文面とともに掲載されている〔左図〕。『撥雲余興』に記す「阪上将軍木像記」には、腰帯の後ろに「阪上卿真像」、左足裏に「弘仁二年月日」、右足裏に「調首内人」の文字があるとし、原資料でもその墨書銘が確認できる。

古代中国風の鎧の表現は中国皇帝墓

に副葬される兵馬俑を彷彿とさせるが、頭巾状の兜や草摺を伴わない鎧、腰帯を巻く姿は土佐光信『清水寺縁起』(永正14年•1517)巻中に登場する蝦夷の軍勢が示す服制と類似している。田村将軍(坂上田村麻呂)の肖像は、通常は大袖や草摺を伴う大鎧姿や衣冠束帯姿で表されるが、〈田村将軍像〉は蝦夷の軍勢と同じ服制で表され、蝦夷征討を想起させる姿である。こうした歴史的事件、物語性を想起させるイメージソースを帯びた肖像は近世以降にみられ、彫技の点からも江戸時代の制作とみられる。

『撥雲余興』には、暁斎の「田村将軍肖像」の挿絵（前頁）とともに明治8年11月下旬に寄せた武四郎の一文があり、そこに田村将軍像は浅野長祚の所蔵で松平忠敏の邸宅で拝見して以来、片時も忘れられなかったが「去年五月ノ初ニ安藤龍淵翁モテ乞シニ其月ノ廿四日翁御像ヲ抱来リテ事調ヒシ」と安藤龍淵を介して浅野長祚から入手したと記している。したがって田村将軍肖像は明治7年5月24日に入手したことがわかる。

⑮〈如来立像〉

箱蓋裏には「南都新薬師寺蔵 / 明治十八年五月得之」と記され、明治18年（1885）5月に入手したことが判明する。

武四郎は明治18年4月14日から5月31日にかけて大台ヶ原登山を行っており、往路の5月8日に薬師寺、唐招提寺を見た後、正午に奈良町に至り諸方を参詣している（『乙酉掌記』(9)）。その折に入手したものと思われる。同じく⑯〈如来立像〉も箱蓋表に「南都極楽院 / 千体仏 二躯」とあって同時期の入手とみられる。南都極楽院とは現在の元興寺で、元興寺極楽坊には886体にのぼる千体仏があり、本堂の天井裏からの発見品と境内からの発掘品があり、前者は比較的保存状態が良好とされ(10)、武四郎蒐集の千体仏は天井裏からの発見品とみられる。

〈⑰橘諸兄像〉

明治13年（1880）6月8日の京都二条•善導寺で開かれた尚古会に水茎氏所蔵で出品されたことが『庚辰游記』の記述からわかる。〈橘諸兄像〉は『撥雲余興』第二集（明治15年8月）に掲載され、そこに詳しい入手時期、事情が記されている。『撥雲余興』二集の文によれば、武四郎は橘諸兄像を尚古会でみた後、人を介して譲ってはもらえないかと頼み、宿でいい返事を待ったがうまくいかず、あきらめて10日の朝、京都駅から汽車に乗りかけたところ慌ただしく婦人が駆け込んで来てこの像を手渡し、武四郎は婦人に金銭を渡して帰京したという。従って橘諸兄像の入手時期は明治13年（1880）6月10日である。なお原資料は現在確認できていない。

⑱〈地蔵菩薩立像〉

像背面には、武四郎による「秩父般若窟第三十三番札所 / 千躰仏也 / 明治十八年十月七日受之」の墨書銘があり、明治18年10月7日に入手したことがわかる。明治18年の『乙酉後記』には、三峯山登山、秩父三十四観音霊場巡りが記され、10月7日の記事に「三十二番石船山法性寺。般若窟に地蔵尊、千体仏を安置。」とあるので、背面墨書銘の「第三十三番札所」は第三十二番札所の誤写とみられる。

〈⑲妙楽菩薩塑像〉

松浦武四郎記念館に所蔵されており、明治10年（1877）三浦乾也の作である。彩色は河鍋暁斎が行っているので、明治10年以降に入手したとみられる。

このほか「武四郎涅槃図」の春日卓上には、頓阿作僧正遍照坐像、雑司ヶ谷西行堂旧蔵西行法師立像、荘厳具•真鍮仏、石仏、頓阿作西行法師坐像、聖徳太子騎馬像（以上、原資料は静嘉堂文庫蔵）、老子像、鉄製大黒天像（以上、原資料は松浦武四郎記念館蔵）が描かれるほか、絵画においても扶桑周耕「猿猴図」（双幅）、雪竹「布袋図」、伝雪村「壁書図」、作者不詳「藤原朝忠像」、月僊「伊勢万歳図」、福田半香「鍾馗図」（以上、原資料は松浦武四郎記念館蔵）から各モチーフを取り上げて、悲嘆にくれる姿に改変して描いているが、明治19年までに入手したことがわかるだけで、詳細な入手時期については不明である。

「武四郎涅槃図」に描かれたコレクションのなかから入手時期、経路がわかる資料を取り上げて検討してきた。その結果を一覧表にまとめると〔表〕のようになる。

〔表〕の入手時期の冒頭に△を付した資料は河鍋暁斎が「武四郎涅槃図」草稿に着手した明治14年以前に武四郎が入手した資料であり、▼と付した資料は暁斎が草稿着手後に武四郎が入手した資料である。

描かれた彫刻類35件中入手時期が判明した資料が17件、そのほか絵画2件の計19点であった。このうち、明治14年8月に入手したシャブティを除いて、草稿の着手前に武四郎の所蔵品となった資料は8点、着手後に武四郎が入手、所蔵した資料が10点で、暁斎が「武四郎涅槃図」草稿に着手してから蒐集した資料が多いことがわかる。半数の資料での判断では不十分であると考えるものの、絵師の暁斎にとっては、草稿を開始してもこれもあれもと入手した資料を持ち込んでは、モチーフに加えてくれと頼む武四郎は、厄介な依頼者であったと想像される。

表　入手時期が判明する「武四郎涅槃図」中のコレクション

	資料名	所蔵	入手時期	経路・備考	典拠
①	鉄製御正体	静嘉堂文庫	△明治9年8月～	田中行氏旧蔵	『尚古図録』第二編
②	図像瓦（瓦仏）	静嘉堂文庫	△～明治12年8月		箱書
③	柿本人麿坐像	静嘉堂文庫	▼明治16年3月17日～	焼津・松村宗吾	癸未溟誌
④	宇須女像	静嘉堂文庫	△明治10年冬		箱書
⑤	とりもち仏	静嘉堂文庫	▼明治15年5月5日	周防・近藤清石	壬午遊記
⑥	頼朝仏	静嘉堂文庫	▼明治17年3月31日	市河万庵	甲申日記
⑦	鉄製懸仏	松浦武四郎記念館	▼明治16年3月17日～	大宮・角田風興	癸未溟誌
⑧	如意輪観音像	静嘉堂文庫	△明治12年5月19日～	建仁寺禅居庵梧庵	尚古杜多
⑨	妙楽菩薩像	松浦武四郎記念館	△明治10年～		
⑩	武者像（根付）	静嘉堂文庫	△～明治11年冬		箱書
⑪	猿田彦大明神像	静嘉堂文庫	▼明治16年3月17日～	清水・中泉昇平	癸未溟誌
⑫	シャブティ	静嘉堂文庫	△▼明治14年8月下旬		箱書・文書
⑬	田村将軍肖像	静嘉堂文庫	△明治7年5月24日	浅野長祚	『撥雲余興』1
⑭	如来立像（小）	静嘉堂文庫	▼明治18年5月	新薬師寺	箱蓋裏書
⑮	如来立像（大）	静嘉堂文庫	▼明治18年5月	極楽院	箱蓋裏書
⑯	地蔵菩薩立像	静嘉堂文庫	▼明治18年10月7日	秩父千躰仏	背面墨書銘
⑰	橘諸兄像	所在不明	△明治13年6月10日	京・善導寺尚古会	『撥雲余興』2
⑱	蛤蜊観音像	松浦武四郎記念館	▼明治16年4月～5月		癸未溟誌
⑲	白衣観音大士	松浦武四郎記念館	▼明治16年4月～5月		癸未溟誌

2. 河鍋暁斎と武四郎

「武四郎涅槃図」の制作者である河鍋暁斎と武四郎との親交についてみてみたい。

河鍋暁斎と武四郎の交流は藤田昇氏が詳細に説いておられ(11)、これまでみた武四郎の著作からも見てとれる。暁斎は『撥雲余興』第1冊では、「田村将軍肖像」、「燧枓」、「武州比企郡大谷村掘出埴輪物」「漢父葵爵之図」「宝字鍔」「漢匾壺」「鞍馬山寺延暦升」「古銅老猿假面」、『撥雲余興』第2集では「橘諸兄卿之像」「土馬五躯」「信濃国小縣郡掘出万字鈴」「鬼面鈴」の挿図を担当している。『撥雲余興』の挿図は、暁斎以外にも秦蔵六や柏木政矩などが担当しているが、陰影をつけて対象を立体的に描写する手法は絵師暁斎の面目躍如たる描写であり、武四郎が「武四郎涅槃図」制作を依頼したのも暁斎の画才を高く評価していたことにほかならない。

「武四郎涅槃図」制作をめぐる河鍋暁斎と武四郎のやりとりのなかで興味深い史料がある。暁斎から武四郎へ差し出された明治17年12月22日付「暁斎の一札」と称する書状である(12)。

（前略）約そ昨年より認来候涅槃像も落成後は兆典主羅漢元信壽老幷乙信実歌仙師信屏風と被下候由實に有難仕合に奉存候（中略）涅槃像不仕候節は兆典主元信返納仕候為後證さし入レ一札如件

湯島四丁目
二十二番地
河鍋暁斎

明治十七年
十二月二十二日
松浦武四郎殿

大意は、およそ昨年（明治16年）よりしたためてきた「涅槃像」完成の折には、武四郎が所蔵する明兆羅漢図、狩野元信寿老図、藤原信実歌仙図、菱川師宣の屏風を（暁斎に）譲り渡すと約されたことは誠に有難き幸せであり、涅槃図未完の節は、既に前渡しとして譲られた明兆羅漢図、狩野元信寿老図を返納すると誓わせている。

とはいえ、「暁斎の一札」が交わされた時点でも、武四郎は「武四郎涅槃図」に描かれた如来立像（大）（小）や地蔵菩薩立像（秩父千躰仏）はまだ入手していない。

河鍋暁斎記念美術館蔵『暁斎絵日記』（乾・坤）[13]は、明治18年1月1日から2月28日までと6月の一部、7月1日から11月18日までの絵日記である。『暁斎絵日記』には、頻繁に武四郎や「武四郎涅槃図」に関する事項が記されている。明治18年1月2日に「松浦先生」と記載されるのをはじめとして、翌日には松浦武四郎記念館蔵「鐘馗図」と思しき絵画が描かれ、1月22日には涅槃図を眺める「松浦先生」、26日には包みを開ける「松浦先生」などが描かれている。2月7日には「松浦ハいやみのろうじん」、翌8日にも「松浦老人いやみ」と記している。2月9日には「松浦先生のねはんの内」と添書きされた画面は「美人出生」と題した人物略画が描かれており、「武四郎涅槃図」にみる雲上の摩耶夫人に見立てて描かれた遊女・禿、舞人の構図を左右反転した図によく似ている。

2月22日には、「武四郎涅槃図」に筆を入れる暁斎と弟子の八十五郎（暁亭）が描かれ、その下には画料20円を支払う武四郎とそれを受け取る「とよ」（暁斎娘）が描かれている。10月15日には掛幅を広げる「松浦先生」が描かれており、描かれた掛幅は松浦武四郎記念館蔵伝雪村「壁書図」のようである。10月26日にも傍に包みを置いた「松浦先生」の横で、とよが「ねはん」図を手掛けるさまが描かれている。骨董好きでもあった暁斎にとっては、武四郎が次々に持ち込む蒐集品によって草稿が完成できないまま、前渡しとして明兆羅漢図、狩野元信寿老図を受け取っており、さらに制作途中で画料まで受け取ったことに対して忸怩たる思いであったと思われ、「武四郎涅槃図」の制作が一筋縄では行かなかったことが『暁斎絵日記』からも読みとれる。いっぽう、所蔵の絵画を譲り完成後にも追加の絵画を譲る約束をし、また制作途中で画料を支払った武四郎の「武四郎涅槃図」に対する思い入れは並々ならぬものであったものと考えられる。

と同時に、「涅槃図」が未完成の時には、前渡しとして暁斎が受け取った明兆羅漢図、狩野元信寿老図を武四郎に返納すると約束した点にやや疑問をもつ。

「武四郎涅槃図」画面下には薄墨とわずかな濃淡で概形を示した恵比寿・大黒天像や蛙、狛犬などが描かれており彩色はなされていない。そのため概形のみが描かれた人物・動物は未完成－武四郎が未だ入手していない蒐集品－と思われるものの、「武四郎涅槃図」には落款印章があることから暁斎はこれで完成としており、旧軸木墨書にも「落成」とある。暁斎は、薄墨で描かれた人物・動物が明快な形や色彩をもつまで－武四郎が資料を入手するまで－「涅槃図」制作を一時中断することも可能であったはずである。旧軸木には明治14年に河鍋暁斎が草稿を始め、「暁斎の一札」では明治16年に（本画）制作を始めたとし、1年以上も草稿に費やしたことになる。持込みが落ち着いた頃に草稿をまとめたうえで本画の制作に着手

することも可能であった。にも拘わらず「イヤミ老人」と言いながらも武四郎の要求を受け入れたのは、「武四郎涅槃図」の制作期限が決められていたのではないか思われる。制作期限があったにも関わらず、遅れがちの制作がいっそう遅れることを知りつつも涅槃図のモチーフとして描き加えてほしいと蒐集品を持込んでくる武四郎を暁斎は「イヤミ老人」と評したのではないだろうか。

暁斎が明兆羅漢図、狩野元信寿老図を返納した記録はないため、「武四郎涅槃図」は制作期限に間に合ったとみられ、「武四郎涅槃図」制作期限の下限は明治19年3月であったと推測できる。

改めて武四郎の蒐集品についてみてみると、松浦武四郎記念館蔵『蔵品目録』「神仏像類」には「歌舞伎人形／寛文年間作」以外、卓上の蒐集品をほぼ網羅している。「歌舞伎人形」も雲上の遊女・禿、舞人、あるいは卓上の義経・弁慶に該当するかも知れない。そうであるならば「武四郎涅槃図」完成以降は、武四郎は新たな「神仏像類」の蒐集を行っていなかったとも推測できる。

3. 武四郎にとっての明治19年

では、武四郎にとって「武四郎涅槃図」が完成した明治19年はどのような年であったのだろうか。

明治19年には『丙戌前誌』『丙戌後記』を著しているが、『丙戌前記』では4月9日から5月22日まで大台ケ原、上北山、大杉谷に旅して小神鏡奉納と建標を行い、『丙戌後記』では、10月7日から16日まで妙義山登山、善光寺、戸隠神社参詣のため信州、上毛地方を訪れており、『丙戌前誌』『丙戌後記』に「武四郎涅槃図」に関わる記事はみられない。

12月には東京神田五軒町の自宅に「一畳敷」を増築している。翌年には「一畳敷」に使用した古材の出処と寄進者、使用場所を明記した『木片勧進』を刊行した。『木片勧進』冒頭には、「我 若きより一ツの行李を肩にし 六十余州蝦夷樺太まで踏徧し、後当地に往来する事殆ど四十年、終にこの神田五軒町を一区の死陀林として住めり」と記しており、武四郎は「一畳敷」を終の棲家と考えていたようである。また『木片勧進』「壁書」には、自分が死んだ後はこの一畳敷を壊して木材にして亡骸を焼き、遺骨は大台ケ原に分骨するよう遺言も残している。「武四郎涅槃図」も自らの末期を考えて「一畳敷」に掛けられたものであろうか。

「一畳敷」の床の間の幅は、畳の短辺(江戸間で88cm)よりも短い。「武四郎涅槃図」は本紙幅が84.2cmで、表装を含めると一畳敷の床の間に懸けるのは困難である。従って「一畳敷」の増築に合わせて「武四郎涅槃図」の制作を意図したとは考えられない。

ここで「武四郎涅槃図」について改めて考えてみたい。

箱書には「北海道人樹下午睡図」とあるものの、「武四郎涅槃図」は安村氏の指摘通り「見立て涅槃図」である。見立て涅槃図は、仏涅槃図の変容の一種で、入滅する釈迦の姿を法然や日蓮などの高僧や歌舞伎役者などの著名人に置き換えた図で、江戸時代に盛行した。一般には仏涅槃図の「戯画」「パロディ」として理解されている。

いうまでもなく仏涅槃図は、入滅する釈迦と釈迦を取り囲む菩薩や仏弟子、会衆、動物が嘆き悲しむ情景を描いた仏画であり、釈迦の入滅日に行われる涅槃会の際に懸架されるもので、古くから多数の作例を確認することができる。

仏涅槃図の制作意図をみると、釈迦の入滅という仏涅槃図の制作を通して現世の人が親しい故人の追善供養のために制作した作例をいくつか認めることができる。

例えば、京都・本法寺所蔵の長谷川等伯「仏涅槃図」(慶長4年・1599)は、裏面に日蓮聖人や日親上人以下の歴代本法寺住職、等伯の祖父母や養父母、息子の久蔵ら家族の供養名が記されており、等伯が息子の長谷川久蔵(文禄6年(1593)6月没)の七回忌追善供養のために描いた作品とされている。また大阪・長安寺「仏涅槃図」も紙背の銘記によれば、師の狩野甚之丞(狩野永徳甥)の十七回忌追善供養のため

に弟子の狩野徳庵が涅槃図を制作寄進したとされ(14)、京都・本圀寺所蔵の狩野元俊「仏涅槃図」も元俊の亡母妙安の五〇回忌に際して寛永19年（1642）に制作したものとされる(15)。さらに石川・建聖寺所蔵「仏涅槃図」は、加賀藩主前田利常の子亀松（万菊丸）が慶安2年（1649）に5才で夭逝し、その死を悲しんだ乳母や侍女たちが亀松の追善供養のために没後の翌年に制作したことがわかる。

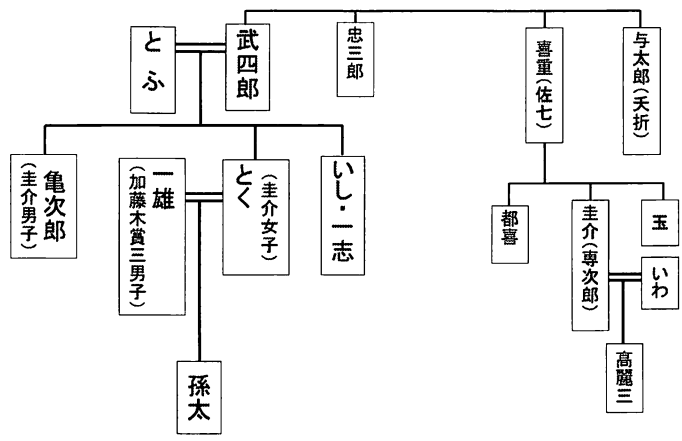
このように仏涅槃図の制作を通して親しい故人の追善供養を行うことは、「見立て涅槃図」の制作においても共通していたとみられ、伊藤若冲「果蔬涅槃図」も寛政4年（1792）の弟白蔵の死去に際して描かれた、あるいは安永8年（1778）に没した母の成仏と家業の繁栄を祈ったものであるとする説が提示されており(16)、涅槃図制作の意図からみて従うべき見解と思える。

こうした「仏涅槃図」への理解をもとに改めて「武四郎涅槃図」を見ると、単に「見立て涅槃図」としての性格を超えて、武四郎自身の身辺に関わる何らかの追善供養の意味が含まれていたのではないかと推測される。その意味を踏まえてこそ、河鍋暁斎が制作の難渋に対する不平を口にしながらも「武四郎涅槃図」を期限内に制作し、小野湖山が「拈香三拝」して箱書をしたためたことへの理解ができるのではないだろうか。

4.「武四郎涅槃図」の制作意図

そこで武四郎周辺の系譜についてみてみたい。

武四郎の系譜については右図のようになる(17)。武四郎と妻とうは、安政6年（1859）9月に結婚し翌年にとうは妊娠するが流産し、元治元年（1864）に一志（いし）が生まれる。しかし一志は、明治6年(1873)10月に10歳で亡くなる。東京・染井霊園にある武四郎墓の傍に立つ一志の墓碑は、正面に一志の書で「あむあみだぶつ」、他面に鷲津毅堂が記した墓誌を市河万庵が揮毫した墓碑銘が刻まれている。



『己卯記行』明治12年(1879)4月19日には、「亡児いしの日牌を納、焼香し畢て無量寿院。」の記述があり、一志（いし）の七回忌に際して、妻とうと共に高野山へ上り、日牌を納めていることがわかる。

一志（いし）亡き後、武四郎は甥の松浦圭介の次男である亀次郎（慶應3年（1867）生まれ）を養子に迎えた。ところが、亀次郎は病を患う。『己卯記行』明治12年3月15日には「児亀次郎は大病院えよく頼み置」とあり、同年8月16日付松浦圭介宛の武四郎書簡(18)には「亀次郎病気之事毎々尋被呉候、六月下旬腫もの破れ其後大ニ宜然」などと、亀次郎の病状は一進一退を繰り返した。

明治13年の稿本『庚辰紀行』では、武四郎が4月12日に東京を出発し、四日市、郷里の小野江、伊勢から高見峠、吉野から大峯奥駈道で大峯縦走を果たし熊野に出て、その後中辺路を通って紀伊田辺、和歌山、大阪、京都から四日市に戻り6月17日に帰宅する旅を行っている。『庚辰紀行』6月17日の記述には、武四郎の帰宅も亀次郎はさして喜ぶほどの気力がなかったことが記されている。亀次郎は、武四郎帰宅後まもない明治13年（1880）7月9日に14歳で亡くなる。

大峯縦走・熊野への旅の往路、武四郎は小野江で親戚筋にあたる駒田倍吉宅に立寄るが、不在であった。亀次郎死去後の明治13年8月11日付駒田倍吉宛書簡には、以下の文面が記されている(19)。

若山ヨリ大坂へ向帰府致し、其後早々書状さし出候筈之処亀次郎死去、彼是多忙右ニ附色々取込失

敬仕候、其節者早々仏前へ香典御送り被下候処、未た御返事不申上候

亀次郎死去から1ヶ月が過ぎても香典を頂いたことに対する御礼も出来ていないことから武四郎の失意が伝わる文面である。

さて、明治19年7月9日は亀次郎七回忌にあたる。一志（いし）の七回忌に際して、武四郎ととうは高野山へ日牌を納めたが、亀次郎七回忌に際しても何らかの供養が行われたと考えるのが自然である。

亀次郎が養子であることを踏まえても、武四郎にとっては一志（いし）没後のかけがえのない愛児であり、亡児を想う武四郎の心境に一志（いし）と同様の供養を行いたい意向を持っていたとしても決して不自然ではない。

「武四郎涅槃図」は明治19年7月5日に表装が行われて完成に至るが、これまでの考察から「武四郎涅槃図」は7月9日前後に行われたであろう亀次郎の七回忌供養に合わせて制作されたのではないかと考えられる。つまり「武四郎涅槃図」の制作は、亀次郎の七回忌供養のために、武四郎ならではの奇想天外な「見立て涅槃図」制作をもって亀次郎の供養追善に供したと考えられるのである。

おわりに

以上、「武四郎涅槃図」について考察した。これまで「武四郎涅槃図」は、自身が蒐集したコレクションに囲まれて幸せそうに午睡をする武四郎の姿を涅槃図に見立てて描いた作品として理解されてきたが、上述のように亀次郎の七回忌供養のために武四郎が制作したと考えた。

このような結論にたち、改めて入手時期が判明した19件の作品をみてみると、亀次郎生存中の蒐集品は、①鉄製御正体、②図像瓦（瓦仏）、④宇須女像、⑨妙楽菩薩像、⑩武者像（根付）、⑬田村将軍肖像、⑰橘諸兄像の7件に過ぎない。このうち田村将軍肖像、橘諸兄像は前述したように『撥雲余興』に掲載されることから武四郎愛玩の蒐集品である。仮にこれらの蒐集品を春日卓の上に置いた時、「武四郎涅槃図」は実にさびしい閑散な印象を免れないだろう。

武四郎の蒐集品は、考古資料や書画、印章、貨幣、経巻、中国青銅器など多岐にわたるが、彫刻類は少ない。このことは各地を旅行し「古物会」に参加しても彫刻に関する出品、記述が僅少であることからも裏付けられる。

武四郎が亀次郎七回忌供養のために「武四郎涅槃図」を構想し、その制作を知己の河鍋暁斎が引き受けたが、予想以上に適した彫刻類が少ないことがわかり、その後の「古物会」や各地で相応しい彫刻類を蒐集、入手したものと思われる。特に草稿開始後の明治16年や完成前年にあたる明治18年の彫刻類の蒐集はすさまじく、次々と持ち込まれる彫刻類の前にして暁斎も辟易した状態であった。明治19年7月5日に「武四郎涅槃図」がようやく完成し小野湖山が「拈香三拝」して箱書をしたため、7月9日の亀次郎七回忌に間に合わせたのである。

「武四郎涅槃図」にみる武四郎は、蒐集したコレクションに囲まれて幸せそうに午睡する姿で描かれているが、古物蒐集に奔走しながら愛児を失った悔悟の念を示した武四郎の姿でもあった。

註

（1）安村敏信「奇想の仏画　北海道人樹下午睡図」『幕末の探検家松浦武四郎と一畳敷』INAX出版、2010年6月。同「松浦武四郎と絵師たち」『静嘉堂蔵松浦武四郎コレクション』静嘉堂、2013年10月。

（2）箱蓋等の銘記は内川隆志編『静嘉堂文庫蔵松浦武四郎蒐集古物目録』（2013年3月）に拠った。

（3）松浦武四郎著・松浦孫太解読・佐藤貞夫・武四郎を読む会編『癸未溟志』松浦武四郎記念館、2013年3月。

（4）なお校本『癸未溟志』では、「富士薬師岳本地佛」の出品者は大宮・角田風興吉となっている。

（5）松浦武四郎著・松浦孫太解読・佐藤貞夫編『壬午遊記』松浦武四郎記念館、2011年1月。

（6）前掲註5に所収。

（7）松浦武四郎著・福永昭・唐津巳喜夫・佐藤貞夫解読・佐藤貞夫編『己卯記行』松浦武四郎記念館、2015年3月。

（8）島地黙雷『航西日策』（二葉憲香・福嶋寛隆編『島地黙雷全集』第5巻、本願寺出版、1978年）。

（9）松浦武四郎『山岳紀行六種』〔新選覆刻日本の山岳名著〕（乙酉掌記全、乙酉後記 全、丙戌前記 全、丙戌後記 全、丁亥前記 全、丁亥後記 全）大修館書店、1978年。

(10) 辻村泰圓他編『日本仏教民俗基礎資料集成』第5巻（元興寺極楽坊5 印仏 摺仏 刷札 板絵 千体仏）中央公論美術出版、1974年3月。

(11) 藤田昇「松浦武四郎と暁斎の交流」（その1・その2）河鍋暁斎研究会『暁斎』64・65号　河鍋暁斎記念美術館、1991年2月）。

(12)「涅槃図・暁斎の一札（「書斎第3号」）」『暁斎』43号　河鍋暁斎記念美術館、1991年2月。

(13) 河鍋楠美編『暁斎絵日記』（四）　河鍋暁斎記念美術館、2010年1月。

(14) 佐伯英里子「長安寺所蔵『仏涅槃図』―狩野甚之丞の没年について―」『国華』第1466号、2017年12月。

(15) 土居次義「京の涅槃図 ―特に本圀寺の涅槃図について」（『近世日本絵画の研究』美術出版社、1970年6月）、田中敏雄「江戸時代初期の狩野派の動向 ―狩野元俊の場合」（大阪芸術大学紀要『藝術』12、1989年11月）。

(16) 佐藤康宏『日本の美術』256号、至文堂、1987年9月。

(17) 三雲町史編集委員会『三雲町史』第3巻資料編2（三雲町、2000年11月）所収の「松浦武四郎系譜」（634頁）を参考とし編集した。

(18) 前掲註17『三雲町史』。

(19) 前掲註17『三雲町史』。

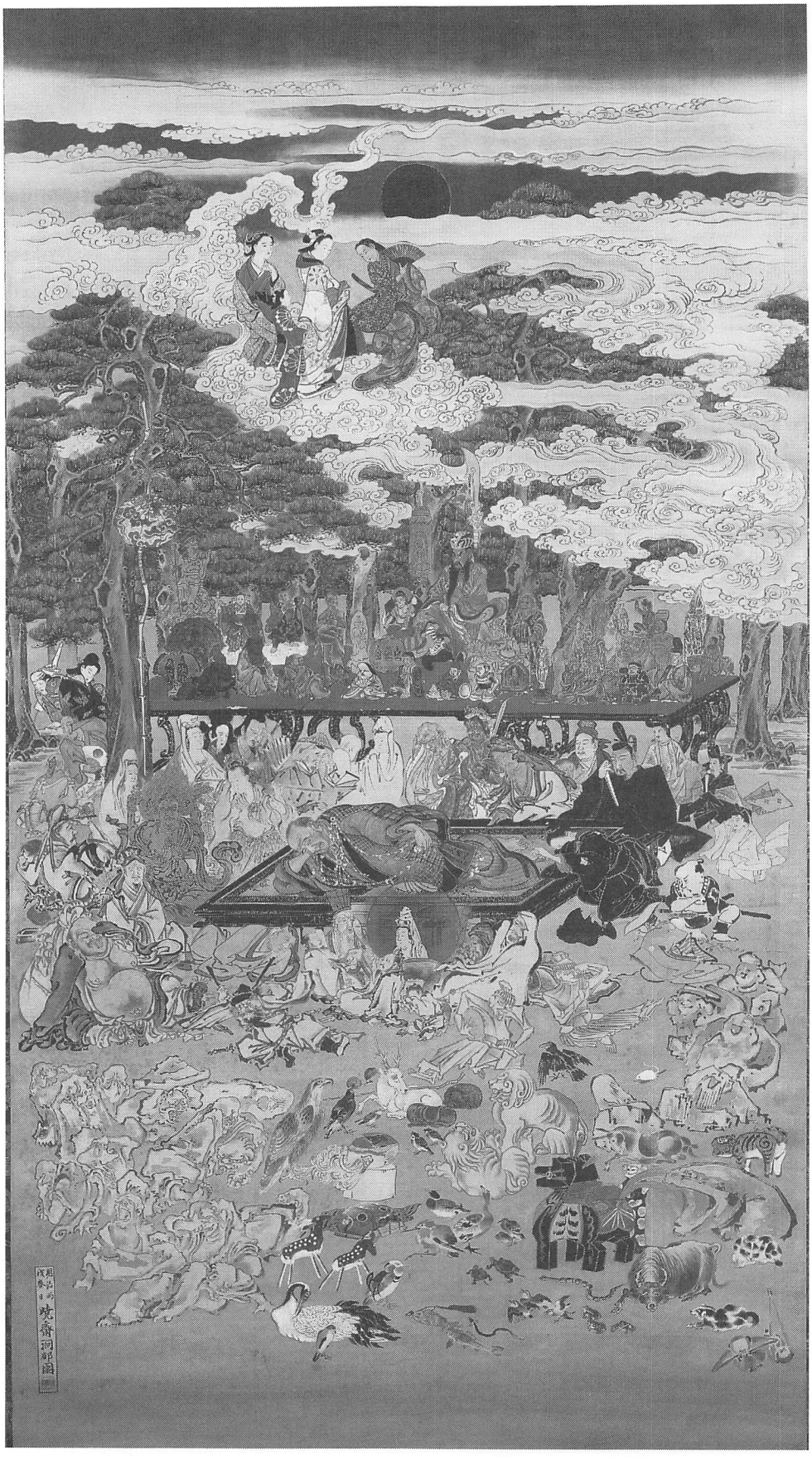


図　河鍋暁斎筆「北海道人樹下午睡図」（松浦武四郎記念館蔵）

シーボルト兄弟の明治蝦夷見聞
――日本民族アイヌ起源説と蝦夷植民地化計画をめぐって――

堅田　智子

はじめに

幕末・明治期の好古家との交流なしに、H. v. シーボルト（1852-1908）が日本の考古学、民俗学の黎明期にはたした役割を語ることができない(1)。たとえば、松浦武四郎記念館所蔵の「渋団扇帖」には、H. v. シーボルトの自署が残されてる。また、1875（明治8）年12月6日、東京府上大崎の旧松平主殿邸にてH. v. シーボルトが主催した「古物会」に、松浦は蜷川式胤、栗本鋤雲、柏木貨一朗らと参加した。好古家ネットワークの中で、親子ほど年の離れたH. v. シーボルトと松浦が緊密な関係を築いていたことは、注目に値する。

本稿では、人を介した「知」の広がりの一例として、H. v. シーボルトと兄A. v. シーボルト（1846-1911）が実施した蝦夷旅行の実態、さらには旅行の成果をもとに進められたアイヌ研究や蝦夷植民地化計画について、論究していく(2)。

1. シーボルト兄弟の蝦夷見聞

(1) H. v. シーボルトの蝦夷見聞

駐日オーストリア・ハンガリー帝国公使館日本語通訳官H. v. シーボルトは、1878（明治11）年8月から約1カ月間、駐日フランス公使館三等書記官ディースバッハ伯爵とオーストリア・ハンガリー帝国陸軍中尉グスタフ・フォン・クライトナーと、蝦夷旅行へ出かけた。この旅行は、施策のために北海道開

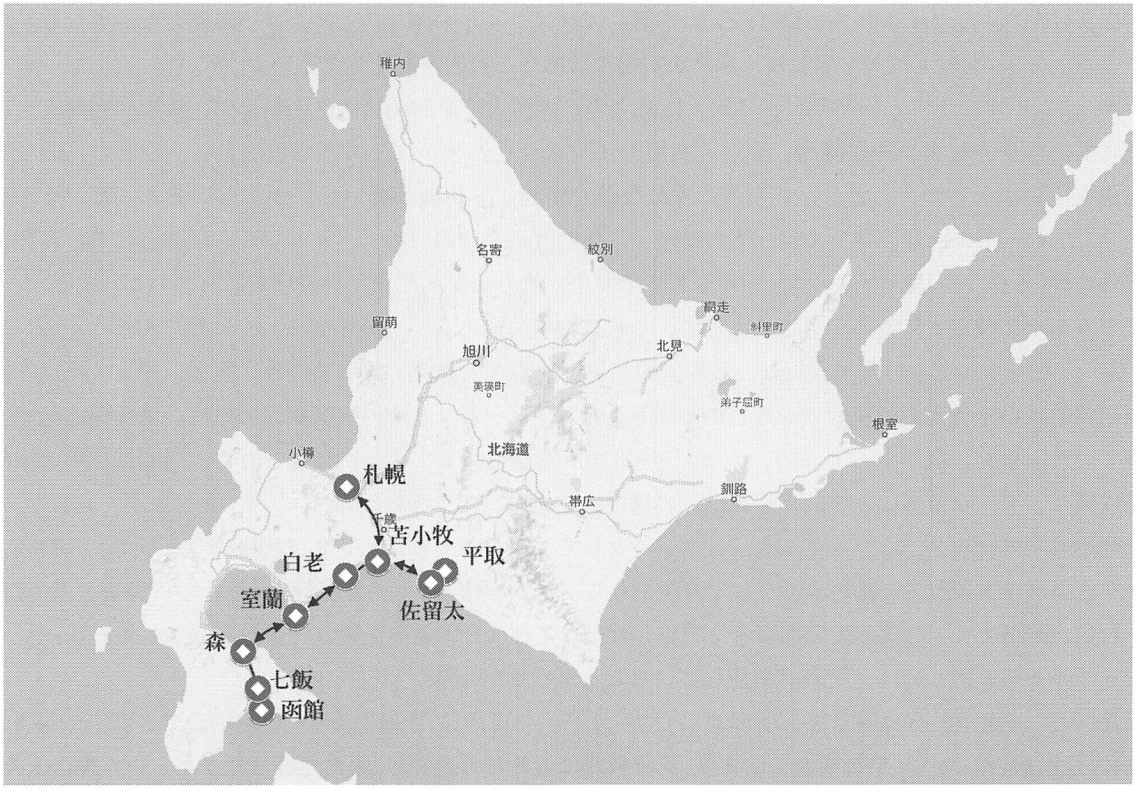


図1　H. v. シーボルトらの蝦夷旅行のルート
宿泊場所、各地での滞在日数は不明（筆者作成）

拓の現状を調査するため、H. v. シーボルトが兄の上司であった大蔵卿大隈重信から委託されたものだった。だが、クライトナーは、旅行の目的を休暇と考え、H. v. シーボルトは、アイヌ研究を目的としており、旅行中には、大きなアイヌ村があった平取に一週間ほど滞在し、アイヌと寝食をともにした。

後述するように、H. v. シーボルトのアイヌや蝦夷へのまなざしや知識は、父 Ph. Fr. v. シーボルト（1796-1866）に由来する。だがそれ以上に、探検家として6回、蝦夷を旅し、蝦夷を北海道と命名した、当代随一の蝦夷通である松浦と知己であれば、生きたアイヌや蝦夷の情報を松浦から直接、得られただろう。

なお、英国人女性旅行家イザベラ・バードや、大森貝塚の調査をめぐり、犬猿の仲の帝国大学法理文学部教授エドワード・モースも、同時期に蝦夷に滞在していた。H. v. シーボルトとバードは、函館、佐留太、白老で会い、バードは『日本奥地紀行』の中で、「オーストリア公使館のハインリッヒ・フォン・シーボルト氏が同時期に得た情報と比較検討する機会に恵まれた。その結果は、あらゆる点で満足すべき意見の一致を見た」と述べた(3)。

H. v. シーボルトは帰京後、すぐさま旅行の成果をまとめ、大隈に「北海道歴観卑見」を提出した。さらに、ベルリン人類学民俗学先史学協会の紀要に、論説「アイヌの毒矢」、「蝦夷島におけるアイヌの民族学的研究」を発表したが、これらは欧米人による最初の民族学的なアイヌ研究であったといわれる(4)。1889（明治22）年4月には、蝦夷旅行中に収集したアイヌコレクション全80点をウィーン帝室自然史博物館（のちにウィーン帝室民族博物館、現ウィーン世界博物館に移管）に寄贈した(5)。

(2) A. v. シーボルトの蝦夷見聞

A. v. シーボルトは、1886（明治19）年7月から約2カ月間、獨逸学協会学校専修科教頭（のちの第6代ドイツ帝国宰相）ゲオルク・ミヒャエリス、帝国大学医科大学教授ユリウス・スクリバと、蝦夷旅行へ出かけた(6)。ミヒャエリスが母に送った書簡によれば、ミヒャエリスとスクリバが旅行を計画していたところ、A. v. シーボルトも加わり、避暑から調査活動へと目的が変化したという。

A. v. シーボルトらと同時期に、外務大臣井上馨、内務大臣兼農商務大臣山県有朋、首相伊藤博文を岳父にもつ内務省秘書官末松謙澄、農商務省雇ドイツ人マックス・フェスカら数十名も、約1カ月間の北海道巡視に出かけた。これは、北海道の施政改革を重視する伊藤の肝いりによるものであった。そもそもA. v. シーボルトは、井上のたっての希望で、条約改正交渉のためにベルリンから呼び戻され、書記官兼外務卿(外務大臣)秘書官として、同年6月まで井上とともに条約改正正会議に参加していた。A. v. シーボルトらは、根室で井上と面会しているが、これは在京時にあらかじめ準備されていたのだろう。

A. v. シーボルトらの蝦夷旅行は、民族学的なアイヌ調査・研究、北海道行政の視察、樺太・千島交換条約締結後の千島列島の視察という目的があり、H. v. シーボルトらの蝦夷旅行に比べ、より政治性を帯びていた。また、後述するように、A. v. シーボルトらが意図していたかは別として、周囲は彼らの旅行の成果に、ドイツ帝国による蝦夷植民地化の再検討をも見いだそうとした。

明治政府外交官 A. v. シーボルトは日本学者として、法学者ミヒャエリスは民族学者として、外科医スクリバはアイヌ研究者、鉱物学者としての顔をもち、各々の興味を生かしながら、旅行中の調査を進めた。一行は、釧路でアイヌ墓所の発掘調査を実施したが、これは日本側の正式な許可を必要としており、A. v. シーボルトがこのために、周到に準備していたことがうかがえる。

A. v. シーボルトらは帰京後、所属するOAG（ドイツ東洋文化研究協会）の定例会で、調査成果を3回に分け、報告した(7)。旅行概要に始まり、兄源頼朝に追われた義経が、蝦夷へ逃げ延びたという義経伝説、鉱物調査の成果、アイヌ墓所の発掘調査の成果とコロポックル研究など、多岐にわたった。また、OAGの機関誌に、ミヒャエリスとの連名による、旅行での携行品全110点のリストである「日本北部諸島へ

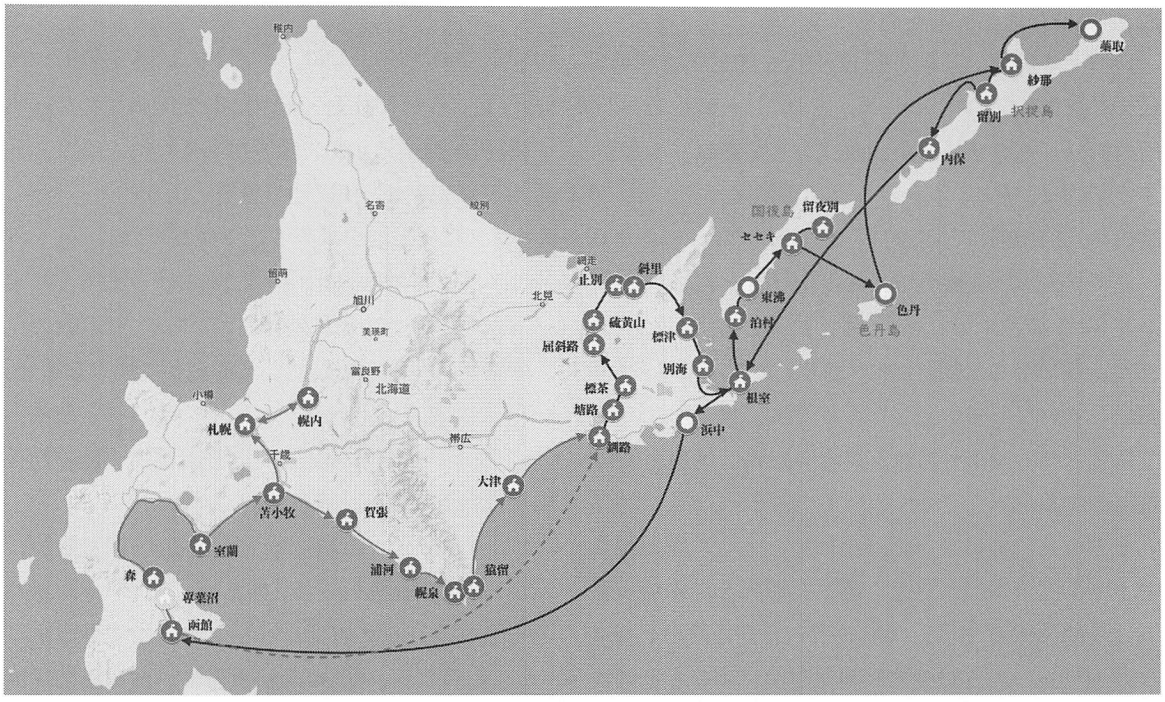


図2　A. v. シーボルトらの蝦夷・千島旅行のルート
○は宿泊をともなわないが、訪問した都市
実線（灰色）で示したルート：A. v. シーボルト単独のルート
点線（灰色）で示したルート：ミヒャエリス、スクリバのルート
実線（黒色）で示したルート：合流後のルート
（筆者作成）

の旅行に関する実践的助言」を発表した。一行は、駐日英国公使館二等書記官アーネスト・サトウらにより出版されたガイドブック『中央部・北部日本旅行案内』第2版を携えて旅行に出かけたが、そこに書かれていた携行品では、野営、官吏やアイヌ村の訪問もふくむ一行の調査旅行に対応できなかったのである[8]。なお、旅行中に収集したアイヌコレクションやアイヌ墓所からの発掘品の行方は、明らかになっていない。だが、2015（平成27）年3月に、筆者がドイツ・ダルムシュタットにあるヘッセン州立博物館を訪問した際、同館が所蔵するスクリバコレクションに、アイヌ住居模型やアイヌの弓矢などアイヌコレクションがふくまれていることを確認した。おそらくこれらは、蝦夷旅行時に収集したものであろう。

2. 日本民族アイヌ起源説をめぐって

シーボルト兄弟のアイヌや蝦夷研究へのまなざしは、アイヌの文化や言語に強い関心をもった父 Ph. Fr. v. シーボルトに由来する。シーボルト兄弟は、1897年に出版された父の大著『日本』第2版を編纂した[9]。とくに民族学や考古学に没頭した H. v. シーボルトは、Ph. Fr. v. シーボルトの学術研究における継承者と見なされ、「小シーボルト」と呼ばれた。

H. v. シーボルトのアイヌ調査の最終的な目標は、アイヌこそが日本の原住民だという、父の日本民族アイヌ起源説を立証することにあった。大森貝塚や蝦夷の住居跡発掘の調査をもとに、アイヌは貝塚文化の民族であり、一時的に九州や四国まで広がりを見せたものの、渡来系民族に撃退され、北に戻ったとし、日本の原住民族ではないと結論づけ、日本民族アイヌ起源説を否定したのだった。

3. 蝦夷植民地化計画をめぐって

1867（慶應3）年から1945（昭和20）年までの間、日独両国の政府は4回、ドイツ人による開拓や移住を計画・検討しており[10]、A. v. シーボルトらの蝦夷旅行もこうした計画・検討の中で実施された。明治政府は、蝦夷を「我が國無比の未開實庫」すなわち「内国植民地」として、重要視していた。一方、ドイツ帝国は、当初、ヨーロッパの国際関係の安定と現状維持を優先させ、植民地の獲得に消極的だったが、国内の人口増加にともない、1884年以降、アフリカや東アジアに植民地を求めるようになった。

ドイツ人による蝦夷植民地化に対するA. v. シーボルトとスクリバの見解は、不明である。一方でミヒャエリスは、旅行中の日記で、夏の蝦夷の風土がドイツに似ており、ドイツの植民地にふさわしいと明言した。また、弟に宛てた書簡には、OAGでの口頭報告を聞いた聴衆が、蝦夷を植民地とすることに魅力を感じ、満足していたと書き記した。聴衆は、標茶付近の開墾地やそこに植えられたヨーロッパの農作物、硫黄山で採掘される硫黄や粗粒玄武岩の鉱物的価値、樺太・千島交換条約による領土画定、択捉島での鮭の漁獲量に関するA. v. シーボルトらの説明を、植民地化した場合の経済効果の試算と理解したのだろう。

そもそも、蝦夷を「内国植民地」として重要視していた日本がドイツ帝国に蝦夷を売却する可能性も、ドイツ帝国が本国から遠く離れた蝦夷を日本から手にいれる可能性も低かった。すると、A. v. シーボルトらの蝦夷旅行では、明治政府の意向をうけ、開拓の可能性を調査したのはたしかだが、絵空事のようなドイツ人による蝦夷植民地化を検討することはなかったと思われる。OAG会員たちが、蝦夷を植民地化することに魅力を感じていたのは、ドイツ帝国の植民地化政策というよりも、むしろ遠い極東の地に祖国に似た場所への憧憬によるものと見るべきではないだろうか。

おわりに

シーボルト兄弟の蝦夷旅行は、大隈重信、井上馨の命令によるものであり、政治性を帯びていたのは明らかだが、父のアイヌや蝦夷へのまなざしを継承し、蝦夷を訪れることで見識を広めたいとの願いが勝っていたようにも見える。

ドイツ人は、みずからの祖先である古代ヨーロッパ人とアイヌを重ね、第二次世界大戦中には、日独の同盟関係を正当化するため、アイヌの存在を強調した。現在、ヨーロッパにおけるアイヌコレクションの所蔵数は、ドイツが最多である。ようやく2017（平成29）年夏には、1879（明治12）年に盗掘されたアイヌの人骨一体が、ベルリン人類学民俗学先史学協会から日本に、外交ルートを通じて初めて返還された。民族学的見地から見て、ドイツ人にとって、蝦夷やアイヌは魅力的な「未開の地」であり、「未開の野蛮人」だった。シーボルト兄弟をふくむ、日本に長期滞在した「明治ドイツ人」は、アイヌや蝦夷にどこか親しみや郷愁を覚え、強い関心を寄せ、蝦夷を目指したのかもしれない。

本稿は、拙稿「シーボルト、ミヒャエリス、スクリバの明治一九年蝦夷見聞」（『鳴滝紀要』第27号、シーボルト記念館、2017年、95-114頁）を大幅に加筆・訂正したものである。

註

（1） 内川隆志「近代博物館における人物資料形成史の一視点――静嘉堂所蔵松浦武四郎旧蔵資料の分析から――」『博物館学雑誌』第40号第1号（通巻61号）、全日本博物館学会、2014年、45-76頁。ヨーゼフ・クライナー編『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』同成社、2011年。笹木義友、三浦泰之編『松浦武四郎研究序説――幕末維新期における知識人ネットワークの諸相――』北海道出版企画センター、2011年。

（2） 1869（明治2）年に、松浦武四郎が蝦夷地を「北加伊道」（北海道）と命名したが、シーボルト兄弟ら「明治ドイツ人」（Meiji-Deutschen）は、“Yezzo”あるいは“Yeso”と呼称しつづけたため、本稿でもこれにしたがい、「蝦夷」に統一した。

（3） イザベラ・バード著、高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社、2004年、18-19頁。

（4） H. v. シーボルトのアイヌ三部作は、H. v. シーボルト著、原田信男、H. スパンシチ、ヨーゼフ・クライナー訳注『小シーボルト蝦夷見聞記』（平凡社、1996年）に訳出されている。

（5） F. Heger, „H. v. Siebold's japanische Sammlungen" In: Dr. Franz Ritter von Hauer (Hg.), *Annalen des K. K. Naturhistorischen Hofmuseums*, Bd. IV, Nr. 4, Wien: Alfred Hölder 1890, S. 111-116.

（6） A. v. シーボルトらの蝦夷旅行の旅程は、以下を参照。Bert Becker (Hg.), *Georg Michaelis: ein Preußischer Jurist im Japan der Meiji-Zeit: Briefe, Tagebuchnotizen, Dokumente 1885-1889*. München: Iudicium Verlag 2001; Vera Schmidt (Hg.) *Alexander von Siebold: Die Tagebücher*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag 1999.

（7） A. v. シーボルトらのOAGでの活動は、以下を参照。*Mittheilung der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens in Tokio*. Bd. IV, Heft 36, Yokohama: OAG, 1884-1888.

（8） Ernest Mason Satow, Lieutenant A. G. S. Hawes, *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan: Being a Guide to Tôkiô, Kyôto, Ôzaka, Hakodate, Nagasaki, and other Cities; the Most Interesting Parts of the Main Island; Ascents of the Principal Mountains; Descriptions of Temples; and Historical Notes and Legends*. 2nd ed. London: John Murray 1884.

（9） Ph. Fr. von Siebold, Alexander und Heinrich von Siebold (Hrsg.), *Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan. Und dessen neben- und schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu-Inseln*. Osnabrück: Biblio Verlag 1969 (Neudruck der 2. Auflage 1897).

(10) アンドレアス・H・バウマン「十九世紀における北海道植民地化計画――三人のドイツ人の試案に関する比較研究――」『日独文化交流史研究』第7号、日本独学史学会、2004年、55-73頁。